



4315  
1

Vertical columns of faint Japanese text within a blue-lined grid.

4315  
1

東京  
 康文交外邊渡



FAS EST ET AB HOSTE DOCEBI

Shuzo Watanabe  
 Tokyo.



特

カ5  
號 4515  
卷 1



臣清隆臣馨謹テ自ス臣等無似叨ニ專對ノ  
 命ヲ奉レ持ニ全權ノ任ヲ忝フス折衝ノ才ニ乏  
 シト雖氏幸ニ尋盟ノ好ヲ全フス伏レテ惟ルニ  
 天皇陛下日月ト明ヲ同シ天地ト德ヲ合ス召蕃  
 歎ヲ納レ琉球藩ト稱ス獨リ彼ノ難林乃チ故俗  
 ニ安ンシ乃チ旧習ニ慣レ久ク外交ヲ絶ツ輶車  
 境ニ入レハ翻然圖ヲ改メ金石渝ラス山河誓ヲ  
 表ス

陛下ノ睿明ト  
 列聖ノ威靈トニ由ルニ非ヌンハ犬馬ノ勞有リ  
 ト雖ニ安ンク能ク微効ヲ奏スルヲ得ン謹テ使  
 鮮始未及ヒ日記ヲ上リ以テ  
 乙夜ノ清覽ニ備ヘ他日ノ參考ニ供ス臣清隆臣

昭和二十二年十月十九日購求



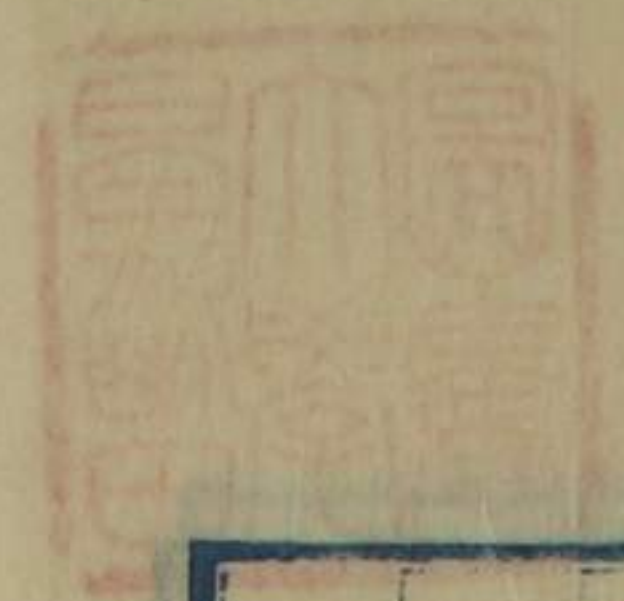
誓誠恐誠惶頭首頭首

明治九年五月一日

特命全權辦理大臣黒田清隆

特命副全權辦理大臣井上馨

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



使鮮始末

目次

綱領

辦理大臣拜命并隨員辭令

訓條

內諭

內諭書中要求條件、儀御達書

儀仗兵護衛艦進退御委任、儀御達書

辦理大臣隨行官負、達書

同隨行官負儀仗兵護衛艦、達書

同水火夫上陸、儀達書

外務卿森公使、訓條

同譯漢文





廣津弘信先報口陳書

訓導玄普運口陳書二通

山之城祐長口陳書

南陽府使應接概畧

江華府地方官并吳慶錫等問情概畧

喬桐府將校等問情概畧

吳慶錫玄普運應接概畧

隨貢ヨリ南陽府使へ、口陳書

吳慶錫高永周等應接概畧

森山茂安田定則江華府ニ於テ應接概畧

宮本小一森山茂江華府留守へ、書翰

同譯漢文

江華府留守復函

二月十日兩大臣接見大官申摠副官尹滋養ト應接筆記

同十一日應接筆記

同十二日應接筆記

同十三日應接筆記

條約案內議

二月二十日兩大臣申尹ト應接筆記

議政府照會底稿ノ寫

森山茂鈴木大亮申摠ト應接筆記

二月廿二日申尹未話筆記

甲申ヨリ宮本小一野村靖ニ附スル憑單

二月廿七日條約交換ノ節應接筆記

修好條規 文付朝鮮者



同譯漢文

修好條規 日朝鮮文有者

朝鮮國王批准

議政府照會

條約順成ノ祝辭

同譯漢文

宮本小一野村清申榎下應接筆記

復命書

附錄

辨理大臣申尹ニ贈ル書稿

明治八年十二月九日 朝廷陸軍中將兼參議開拓長官黒田清隆ヲ以テ特命全權辨理大臣ト為シ朝鮮國ニ差遣セラルル旨 陸軍大臣トシテ二十七日議官井上馨ヲ特命副全權辨理大臣ト為ス

綱領

明治八年十二月九日 朝廷陸軍中將兼參議開拓長官黒田清隆ヲ以テ特命全權辨理大臣ト

為シ朝鮮國ニ差遣セラルル旨 陸軍大臣トシテ

二十七日議官井上馨ヲ特命副全權辨理大臣ト

為ス

前後隨行ノ命ヲ拜スル者陸軍少將種田政明

外務大丞宮本小一外務權大丞森山茂陸軍中

隊佐藤山資紀開拓少判官安田定則開拓幹事小

牧昌業准陸軍少佐永山武四郎開拓使七等出

仕鈴木大亮等合三十一名開拓使出張所中ニ

一局ヲ設ク以テ行事ヲ理ス

二十九日副大臣先發大坂ニ到ル末松謙澄亦同



ク發ス

三十日大臣隨員ヲ率ヒ 謁見陛辭ス又賢所神  
殿ニ謁ス酒饌ヲ賜フ及ヒ綴絹等ノ物ヲ賜フ  
各差アリ

明治九年一月六日午後一時大臣隨員ト共ニ開  
拓使署ヲ由テ玄武丸ニ上リ五時品海ヲ發ス  
此行發遣ノ艦ハ日進孟春玄武高雄矯龍尾館  
六艘トス時ニ孟春艦ハ長崎ニ在リ對州竹敷  
港ニ於テ諸艦ニ會セントス日進艦ハ橫濱ヨ  
リシテ發ス海軍省差遣ノ官員ハ海軍大佐仁  
禮景範中佐有地品之允少佐伊東祐亨日進艦  
井上良馨高雄艦笠間廣盾孟春艦會計少監有馬純  
武大尉柴山天八砲兵司令官志岐守行步兵隊長中等ナ

八日正午十二時神戸ニ抵ル副大臣末松謙澄ト  
共ニ此地ニ在リ相待ツ

九日午前七時解纜

十日午前九時馬關ニ抵リ投錨ス

十一日午後二時解纜

十三日午前八時對州竹敷港ニ入ル孟春艦ニ會

ス高雄丸モ亦踵テ至ル

是ヨリ先キ 朝廷外務少丞廣津弘信ヲ遣リ

釜山ニ抵リ朝鮮國官貨ニ接シ口陳書ヲ以テ

我國大臣ヲ差遣セラル、ノ事ヲ報セシム弘

信已ニ歸テ嚴原ニ留リ大臣ノ到ルヲ俟ツ大

臣人ヲ遣リ之ヲ迎ヘシム弘信即チ竹敷ニ來



リ使命ヲ傳ヘタル事状ヲ陳ス  
諸艦前後皆来リ會ス

十五日午前七時一行釜山ニ向テ發ス午後三時  
釜山ニ達ス

釜山館長代理山之城祐長ヲメ別差李濬秀ニ  
接シ我大臣已ニ對馬ニ到リ直ニ江華ニ發往  
スルノ意ヲ報セシム

大臣 朝廷ニ稟議スル所アリ此港ニ碇泊ス  
ル汽船滿珠丸ヲ雇ヒ小寺秀信ヲメ電信ヲ齎  
ラシ馬関ニ抵ラシム飯田俊助モ亦命ヲ受テ  
帰朝ス

十七日午前七時滿珠丸解纜  
南陽府下ホル子ル島ヲ以テ諸艦相會スルノ

処ト定メ先ツ此地ニ停泊シ江華府ニ進ムノ  
航路ヲ測量シ然ル後發往セントス是日正午  
十二時日進孟春函館矯龍四船解纜ホル子ル  
島ニ向フ

十八日午後五時高雄丸亦發ス  
大臣釜山ニ在リ滿珠丸ノ回報ヲ待ツ而テ連  
日風波該船久ク至ラス乃チ更ニ鳳翔艦ヲメ  
公信ヲ齎ラシ馬関ニ抵リ其回信ハホル子ル  
島ニ米リ遞セシム

二十三日午後一時鳳翔艦解纜本艦亦同ク碇  
ホル子ル島ニ向フ  
二十五日午後三時ホル子ル島ニ達ス諸船皆碇  
泊セラ此ニ在リ



孟春矯龍二船ヲ發シ江華江ヲ溯リ府ニ進ム  
ノ水路ヲ測量セシム孟春ハ南口ヨリシ矯龍  
ハ北口ヨリス

二十六日午前九時矯龍丸解纜種田政明安田定  
則永山武四郎及海軍省御雇セエム、セーラス  
等之ニ乘ル副大臣亦同ク往ク

二十七日午前七時三十分孟春艦解纜樺山資紀  
益滿邦儀等之ニ乘ル

午前十時函館丸ヲシテ南陽仁川沿海ヲ測量  
ニ碇泊ニ便ナルノ港灣及ヒ淡水ノ所在ヲ求  
メシム日進艦長伊東祐亨玄武丸船長シ、シミ  
ツト等之ニ乘ラ發ス

南陽府使姜潤問情トシテ來リ米酒鷄猪等ヲ

贈ル宮本小一ハ收昌業日進艦ニ於テ之ニ接  
ス其物件ハ之ヲ謝還ス

二十八日午後六時函館丸回リ至ル  
二十九日午後一時本艦日進高雄ト共ニ移テ大

阜島側ニ泊ス

ホ  
ル  
子  
島  
ヲ  
距  
ル

函館丸ニ令

シテホル子ル島ニ留リ矯龍丸ノ歸リ至ル氏  
本艦ノ所在ヲ指示シ鳳翔艦ノ來ルヲ待テ共  
ニ同ク大阜島側ニ來ラシム

三十日司譯院堂上官吳慶錫訓導玄昔運來ル宮  
本小一森山茂日進艦ニ於テ之ニ接ス

三十一日午前九時孟春艦回至

二月一日午後三時矯龍丸回至

四日午前十時諸艦一同江華島ニ向テ開行シ南



ロヨリシテ進山前日測量シテ北口ハ航路迂  
回且江口潮流峻急南口ノ便ニ如カサルヲ知  
レハナリ午後一時三十分頃山島下ニ抵リ投  
錨ス

吳慶錫女普運京職五品官高永周ト共ニ日進  
艦ニ來ル森山茂鈴木大亮之ニ接ス

五日矯龍丸ヲホル子ル島ニ遣リ函館丸ニ代ラ  
シム

森山茂安田定則ヲ江華府ニ遣リ大臣上陸ノ  
事ヲ報シ旅館ノ準備ヲ為サシム時ニ朝鮮國  
接見大官判中樞府事申德副官都摠府副摠官  
尹滋承府ニ抵ル森山等副官尹滋承ニ面接シ  
旅館準備等ノ事ヲ了ス

六日森山等帰艦

七日函館丸満珠丸ヲ導テ頂山島ニ到ル外務權  
大丞野村靖 旨ヲ奉シテ來ル小寺秀信ニ亦  
歸リ至ル鳳翔艦ノ汽鐘損所アリ故ニ満珠丸  
之ニ代ルナリ

八日又森山茂ヲ江華府ニ遣リ大臣明後日ヲ以  
テ府ニ入ルヲ報シ且諸般ノ準備ヲ為サシム  
九日儀仗兵若干ヲ遣リ草芝鎮ニ上陸江華府ニ  
赴カシム兵負高雄丸ヨリ脚艇數隻ニ搭シ小  
汽船ニ牽カシメ將ニ本船ヲ離レントス誤テ  
一小艇ヲ覆ス溺ル者十六名高雄及玄武函館  
ヨリ小艇ヲ發シ之ヲ救フ方ニ退潮ノ時ニ際  
シ江流迅急遂ニ二名ヲ失ス多方撈索スレド



得ス

十日午後一時兩大臣諸隨員ヲ率ヒ本艦ヲ發ス  
二ノ小火船ヲノ脚艇數隻ヲ引テ進マシム鎮  
海門前ニ上陸三時四十分江華府副帥營ノ旅  
館ニ入ル直ニ往テ接見大官ノ寓ヲ訪フ申櫛  
尹滋養亦旅館ニ來リ答禮ス

十一日午後一時兩大臣西門内鍊武堂ニ抵リ正  
副官申尹ニ會シ談判アリ宮本ハ一森山茂ハ  
牧昌業浦瀨裕隨同ス

十二日午後一時鎮撫保登營門外執事廳ニ抵リ  
申尹ニ會晤ス宮本ハ一森山茂安田定則ハ牧  
昌業浦瀨裕荒川德滋隨同ス議條約ヲ結フノ  
事ニ及ヒ其草案ヲ示シ十日ヲ限リ決答スル

ヲ約ス

品川丸海軍省送ル所ノ石炭糧食ヲ載ヒ來ル  
十三日午後一時執事廳ニ於テ談判アリ宮本ハ  
一森山茂安田定則鈴木大亮浦瀨裕荒川德滋  
隨同

吳慶錫玄普運來ル森山茂鈴木大亮之レニ接  
ス彼條約案ヲ漢文ニ譯シテ去ル

十六日孟春臘ヲ遣リ仁川富平沿海ヲ測量セシ  
ム  
二十日午後七時兩大臣執事廳ニ至リ申尹ニ會  
晤ス野村清森山茂安田定則ハ牧昌業鈴木大  
亮浦瀨裕荒川德滋隨同是ヨリ先キ朝鮮政府  
吳慶錫ヲ召テ上京セシム蓋シ條約ノ事ヲ議



スルナリ愛錫京ニ在リ條約案中政府異議アルノ件ヲ申尹ニ報ス申尹玄昔運ヲシテ意ヲ我大臣ニ致シ刑改ヲ求ハル者數件大臣其請ヲ所ニ應ス昔運又我旅館ニ來リ條約案ヲ校ス宮本ハ一之ニ接ス因テ條約批准ニ國王署名ノ事彼異議アルヲ知ル故ニ是夜大臣速ニ申尹ニ面接ヲ請フ彼是日京信アルヲ以テ議政府送り來ル所ノ謝辭文案ヲ示ス之ヲ見ルニ語辨解ニ涉リ且江華砲擊ノ事ニ及ハス悔謝ノ意ヲ見ス而シテ批准署名ノ議遂ニ合ハス大臣使事成ラズ已ムヲ得ス帰國スヘキヲ發言シ十二時帰館

野村靖私ニ往テ申徳ヲ訪フ曉ニ至テ回ル

二十一日官本野村森山鈴木申徳ノ館ニ至リ談ハス所アリ

二十二日大臣將ニ府ヲ發セントス安田定則ヲ遣リ別ヲ申尹ニ告ク是ヨリ先キ官本野村屢々申徳ニ説クニ我大臣歸計已ニ決マリ宜ク早ニ及テ圖ヲ改ムヘキヲ以テス此ニ至リ師裝已ニ成ルト聞キ大ニ驚キ速ニ駕ヲ命シ旅館ニ來リテ貴大臣議スル所ノ事速ニ京師ニ稟シ順成ニ至ラシムヘシ為ニ數日ヲ誓留セラレシテ請フト大臣肯テ聽カス彼懇請已マズ遂ニ五日間私ニ留リ報ヲ待ツヲ期シテ別ル時ニ吳慶錫已ニ京師ヨリ至ル申尹又愛錫及ヒ玄昔運ヲシテ上京セシメ稟議スル所



アリ宮本等ニ約スルニ決議五日ヲ限ルヲ以  
テス

午後一時大臣森山安田等ヲ率ヒ府ヲ發シ船  
ニ歸ル副大臣竊ニ府ニ留ル宮本野村小牧鈴  
木等及兵員若干亦同ク留ル

是日孟春臘頂山島ニ回ル

二十四日瓊浦丸馬關ヨリ來航ス飯田俊助公信  
ヲ帶テ至ル

二十五日吳慶錫玄昔運京師ヨリ歸ル彼報スル  
ニ修好ノ議都テ貴大臣ノ言ニ從フ當ニ明後  
日ニ於テ條約ヲ交換スヘキヲ以テス

二十六日午後一時三十分大臣隨員ヲ率ヒ本艦  
ヲ發シ四時副帥營ニ入ル

二十七日午前九時兩大臣練武堂ニ抵リ申尹ニ

會ス種田政明宮本小一森山茂樺山資紀安田  
定則小牧昌業鈴木大亮浦瀬裕等隨同彼此條

約ニ鈐印シ交換ス彼又條約批准及ヒ議政府  
照會文ヲ交シ了リ大臣祝辭ヲ為ス彼宴ヲ設

ケ樂ヲ奏ス十二時別ヲ告ケ直ニ船ニ歸ル宮  
本野村鈴木等猶留ル

二十八日朝宮本等歸リ來ル午前九時諸艦皆解  
纜

三月一日午後三十分馬關ニ抵ル  
二日午前四時同港ヲ發ス

四日午前十時品海ニ達ス兩大臣及隨員一同上  
陸



五日兩大臣參 朝後命ス

Blank page with vertical lines for text.

特命全權辦理大臣トシテ朝鮮國へ被差遣候事

明治八年十二月九日

陸軍中將兼參議黒田清隆

外務權大丞森 山茂

同日應明各通

開拓少判官安田定則

開拓幹事小牧昌業

開拓使七等出仕鈴木大亮

特命全權辦理大臣黒田清隆朝鮮國へ被差遣候

二付隨行被仰付候事

明治八年十二月十三日

開拓使八等出仕佐藤秀顯

同七等書記生石幡貞

外務四等書記生石幡貞



各通

外務四等書記生 浦瀬裕

外務六等書記生 荒川德滋

同 中野許齋

開拓使十三等出仕 小寺秀信

開拓使十四等出仕 山田清重

同文申付候事

明治八年十二月十三日

外務 大丞 宮本小一

同文被仰付候事

明治八年十二月廿二日

陸軍少將 種田政明

陸軍中佐 榊山資紀

陸軍大尉 福田半

各通

同 勝田四方藏

同 岡本柳之助

陸軍中尉 飯田俊助

同 野崎貞次

同 目賀田健

同 井上教之

陸軍少尉 磯林真三

同 中条弘毅

同 山本居周

同 益満邦久

同文被仰付候事

明治八年十二月廿三日

議官 井上馨



特命副全權辦理大臣トシテ朝鮮國ニ被差遣候  
事

明治八年十二月廿七日

准陸軍少佐兼開拓使等崔永武四郎

各 通

正院御用係末松謙澄

開拓使御用係小林可也

特命全權辦理大臣黒田清隆朝鮮國ニ被差遣候

ニ付隨行 敬仰付候事  
申付候事

明治八年十二月廿七日

訓 條

特命全權辦理大臣黒田清隆

一 我カ政府ハ專ラ朝鮮國ト舊交ヲ續キ和親ヲ  
敦クセントテ望ヲ以テ主旨トセルカ為ニ朝  
鮮ノ我カ書ヲ休ケ我理事官ヲ接セサルニ關  
ラズ仍ホ平和ヲ以テ良好ナル結局ヲ得ン  
ト期シタルニ何ソ料ニ俄カニ雲揚艦砲撃ノ  
事アルニ逢ヘリ右ノ暴害ハ當時相當ナル防  
戰ヲ為シタリト云ヘ然レ我カ國旗ノ受  
タル汚辱ハ應ニ相當ナル賠償ヲ求ムヘシ  
一 然レ且朝鮮政府ハ未タ顯ハニ相絶ツノ言ヲ  
吐カス而メ我カ人民ノ釜山ニ至ル者ヲ待遇  
スル丁舊時ニ異ナルトナシ又其砲撃ハ果メ



彼ノ政府ノ命若クハ意ニ出タル欲或ハ地方  
官弁ノ權興ニ出タル欲モ未タ知ルヘカラサ  
ルヲ以テ我カ政府ハ敢テ親交全ク絶ヘタリ  
ト着做サズ

一故ニ我主意ノ注ク所ハ交ヲ續クニ在ルヲ以  
テ今全權使節タル者ハ和約ヲ結フ丁ヲ主ト  
シ彼能我カ和交ヲ修メ貿易ヲ廣ムルノ求ニ  
順フキハ即此ヲ以テ雲揚艦ノ賠償ト着做シ  
兼諾スル丁使臣ノ委任ニ在リ

一右兩個ノ成効ハ必ス相連貫メ結局スヘシ而  
メ鈐印ハ兩案同時ニ於ラスト云氏和約條款  
ノ文案ヲ求メテ叶議ニ至ル丁ハ必ス雲揚艦  
ノ事結案兼諾ノ前ニ在ルヘシ

一雲揚艦ノ砲撃ハ果メ朝鮮政府ノ意若クハ命  
ニ出タル欲我要求尤モ大ニ且急ナルヘ  
シ或ハ其地方官弁ノ擅興ニ出タル欲朝鮮政  
府亦其責ニ任セサル丁ヲ得ザルヘシ

一雲揚艦ノ事ニ付若シ朝鮮政府其責ニ任シ我  
レト蕃交ヲ續クノ誠意ヲ表セス却テ再ヒ暴  
舉ヲ行ヒ我政府ノ榮威ヲ汚サントスルニ至  
テハ臨機ノ處分ニ出ル丁使臣ノ委任ニアリ  
要スルニ朝鮮人慣用スル所ノ依違遷延ノ手  
段ノ為ニ悞ラル、丁勿レ

一和交果メ成ルニ至テハ徳川氏ノ蕃例ニ拘ル  
丁無ク更ニ一歩ヲ進メ左ノ條件ヲ完結スヘ  
シ



一 我日本國ト朝鮮國ト永久ノ親睦ヲ盟約シ  
 彼我對當ノ禮ヲ以テ交接スヘシ  
 一 兩國臣民ハ兩政府ノ定メタル場所ニ於テ  
 貿易スル丁ヲ得ヘシ  
 一 朝鮮國政府ハ釜山ニ於テ彼我人民自由ニ  
 商業ヲ營マシムヘシ且江華府又ハ都府近  
 方ニ於テ運輸便宜ノ場所ヲ擇ビ日本臣民  
 居住貿易ノ地ト為スヘシ  
 一 都府ト釜山又ハ他ノ日本臣民貿易場トノ  
 間ニ日本人行來ノ自由ヲ許シ朝鮮政府相  
 當ノ扶助ヲ加フヘシ  
 一 日本軍艦又ハ商賣船ヲ以テ朝鮮海河レノ  
 所ニテモ航海測量スル丁ヲ得ヘシ

一 彼我ノ漂民ヲ扶助護還スルノ方法ヲ設ク  
 一シ  
 一 彼我ノ親睦ヲ保存スル為メニ兩國ノ都府  
 ニ互ニ使臣ヲ在留セシメ其使臣ハ禮曹判  
 書ト對等ノ禮ヲ執ルヘシ  
 一 彼我人民ノ紛争ヲ防ク為ニ貿易ノ地ニ領  
 事官ヲ置キ貿易ノ臣民ヲ管理ス  
 以上諸款ノ内時宜ニ應シ即令必要ナラ  
 サル件ヲ省略スル丁ヲ得ヘシ

明治八年十二月

太政大臣 三條實美



内諭

特命全權辦理大臣黒田清隆

一 朝鮮人我方求望ニ應スルノ接待ヲ為スルヲ  
除クノ外ハ左ノ三ツノ所作ニ出ルニ過キサ  
ルヘシ

第一

使節ニ對シ凌辱ヲ加ヘ或ハ使節ヲ認メバシ  
テ暴舉ヲ行フ

第二

使節ヲ接セバ又暴舉ヲ行ハズ書ヲ投スレバ  
答ヘス

第三

新約ヲ求メハ支那ノ命ヲ受ケサレハ答ヘ難



シト云ニ托シ又ハ他ノ辭柄ヲ設ケ巧ニ遷延ノ計ヲ為ス

一右第一ノ所為ニ出ルキハ相當ノ防禦ヲ為シ

一旦對馬ニテ引揚ケ速ニ使船ヲ以テ實地ノ

情狀ヲ奏報シ再命ヲ待ツヘシ第二ノ所為ニ

出ル時ハ我ノ隣誼ヲ重シシ和平ヲ主トスル

ノ好意ヲ認メサルノ罪ヲ責メ我政府別ニ處

分アルベシトノ旨趣ヲ以テ彼ニ一書ヲ投シ

速ニ其旨ヲ奏報シ後命ヲ待ツヘシ第三ノ場

合ニ於テハ左ノ旨趣ヲ以テ詰責スヘシ

一兩國ノ舊交ハ未タ曾テ支那ノ仲介ニ由ラズ

一昨年東萊府使朴ヨリ森山ニ向テ外務卿ノ書

ヲ接スベキト約ヲ為シタルハ支那ノ許可ヲ

經タル欵今年又前約ヲ違ヘタルモ支那ノ許

可ヲ經タル欵江華島ノ事ハ亦支那ノ許可ヲ

經タル欵以上諸件已ニ支那ノ意ニ出ルニ非

ル片ハ江華暴舉ノ辨償ト將來ノ新約トハ俄

カニ支那ニ經由スルノ理ナシ我カ日本ハ必

ス直チニ之ヲ朝鮮政府ニ向テ要求スヘシ

一若シ朝鮮政府ハ必ス支那ニ問テ後ニ我カ求

メニ應セントナラバ其往復ノ時間ハ我カ兵

隊ヲ京城ニ屯駐セシメ而メ彼ノ餉給ヲ要シ

又江華城ヲ佔有シテ公法ノ所謂強償ノ方法

ヲ行フベシトノ難題ヲ發スベシ

一以上諸件ハ豫畫スル所ト云ヘド實地ノ景况

ニヨリテハ臨機取捨スルハ使臣ノ權内ニア



ルヘシ  
一 我カ朝鮮政府ニ求ムル所ノ件々ニ付其必要  
ヲラサル部外ハ兩國ノ幸福ナル和好ヲ重ス  
ルカ為ニハ臨機酌宜メ我カ意ヲ降シ彼レノ  
言ヲ申フルトヲ得ヘシト云レ左ノ數項ハ必  
ス我カ初議ヲ執ルヲ要スヘシ  
一 釜山ノ外江華港口貿易ノ地ヲ定ム  
一 朝鮮海航行ノ自由  
一 江華事件ノ謝辭  
一 彼レ其説ヲ主張シ若クハ虚飾メ到底我カ必  
要ナル求望ニ應セサルニ至ル片ハ縱令ヒ顯  
ハナル暴舉ト凌辱トヲ行ハスト雖使節ハ  
兩國和好ノ望ミ已ニ断ヘ我カ政府ハ另ニ處

分アルヘシトノ旨趣ヲ以テ決絶ノ一書ヲ投  
シ速ニ帰航メ後命ヲ俟テ以テ使節ノ體面ヲ  
全フスヘシ

明治八年十二月

太政大臣三條實美



特命全權辦理大臣黒田清隆

内諭書要求三項中

- 一 釜山ノ外江華港口貿易ノ地ヲ定ム
- 一 朝鮮海航行ノ自由

右兩件彼國全權ト談判ノ上實地施行ノ特限緩急決定ノ權ハ使臣ト却委任ノ儀ト可相心得事

明治八年十二月廿八日

太政大臣三條實美



儀仗兵兵二護衛艦進退之儀却委任被仰付候  
事

特命全權辨理大臣黒田清隆

明治九年一月五日

太政大臣三條實美

内備書要外三郎中

特命全權辨理大臣黒田清隆



隨行官員

今般朝鮮國へ發遣ニ付テハ該地ノ形勢應接ノ  
事件等新聞社へ投報ハ勿論尋常家信夕リトモ  
該件ニ關スル儀一切書載不相成候條此旨相達  
候事

明治九年一月十四日

特命全權辦理大臣黒田清隆

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '朝鮮' and '新聞社']*



隨行官負儀仗兵

今般江華島へ發行ニ付該地到達ノ上彼國官員  
接對ノ節ハ勿論平常各禮節ヲ嚴ニシ彼國人へ  
對テ放肆傲慢ノ舉動アリ其輕侮ヲ來シ我國體  
ヲ辱メサル様厚ク相心得左ノ條款ヲ遵守致ス  
ハク此旨相達候事

明治九年一月

特命全權辨理大臣黒田清隆

一 諸船乗組人員總テ其上官ノ指令ナク擅ニ上  
陸スルヲ禁ス

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



- 一 道路ニ徘徊放歌シ又ハ往來ノ人ニ對シ無禮ノ振舞且ツ妨碍ヲ為スヲ禁ス
- 一 隈リニ人家ニ立入り又ハ門牆ヨリ窺覘ス可ラス
- 一 市店ニ於テ飲酒ヲ許サス
- 一 婦女子ニ對シ調戲指笑スルヲ禁ス
- 一 賣品タリトモ彼レノ欲セサルヲ強求シ或ハ價格ヲ爭論スル等ノ事アル可ラス
- 一 社寺墳墓等國人崇奉スルノ地ニ於テ無禮ヲ加フ可ラス
- 一 田畝ヲ踏荒シ又ハ竹木等ヲ折リ取ル可ラス
- 一 銃獵ハ勿論妄リニ發炮ヲ禁ス

隨行官員

儀仗兵 護衛艦

諸船乗組人員總テ其上官ノ指令ヲ擅ニ上陸不相成旨相違置候處水火夫等上陸ノ節ハ為取締士官付添可申此旨更ニ相違候事

明治九年一月二十五日

特命全權辨理大臣黒田清隆



特命全權公使森 有禮

我政府、大清政府に對し、親睦、誠意ヲ重スルニ  
カ、為駐劄使臣ニ命ジテ、特ニ大清衙門ニ抵リ、  
朝鮮ニ係レル左ノ事件ヲ報知セム  
我徳川氏ノ朝鮮國ト隣交ヲ修ムル茲ニ三百年  
ナリ、明治元年  
皇政革新、我朝廷禮ニ依テ書ヲ修メ、以テ舊交ヲ  
續キ、和親ヲ敦クシタリシニ、朝鮮國亦テ受ケ  
ス、爾後書ヲ發スル數次、皆報ヲ得ス、容歲、我外務  
官、森山、朝鮮ノ東萊府使朴ヨリ、我外務卿ノ書  
契ヲ修メテ、更ニ、幹使ヲ發シ、東萊府ニ抵リ、相接  
ス、ハキノ約ヲ得、文憑具ニ在リ、我政府期ニ從ヒ  
書ヲ發シタルニ、何ノ料ニ、彼復々漫言相當リ、約



違方接セス又書ヲ受ケス森山空シク歸ルヲ  
致ス但彼ニ在テ未タ頭ニ相絶ツ人言アラサル  
ヲ以テ我ニ在テハ猶好意相交ランコト期セリ  
乃チ九月二十日我火輪船一艘牛莊ニ向テ駛往  
シ朝鮮江華島ノ邊ニ在テ將ニ没水ヲ需メント  
ス俄ニ陸地砲台ノ為ニ轟撃セラレ勢危急ニ逼  
リ己ムヲ得ス相當ノ防禦ヲナシメリ我政府ハ  
朝鮮政府ノ心意ノ在ル所ヲ知ラス或ハ其地方  
官弁ノ擅興暴卒ニ出タルコトヲ疑フ而メ仍隣誼  
ノ泯ヒサランコトヲ望メリ今特命全權辦理大臣  
ヲ發遣シ一面ハ江華島ノ事ヲ問ヒ被ル所ノ暴  
害ノ補償ヲ求メ一面ハ益懇親ヲ表シ彼ノ要領  
ヲ得言好ニ帰シ以テ三百年ノ舊交ヲ續カシメ

ント欲ス要スルニ妥便結局ヲ主トス敢テ多事  
ヲ好ムス未タ朝鮮ノ果ノ平穩ナル辨法ヲ為ス  
コトヲ保セサルカ為ニ兵船ヲ將テ使臣ヲ護セサ  
ルコトヲ得スト雖然レモ亦朝鮮ノ深ク相拒ム  
ニ辭ナキコトヲ知ルナリ但事隣並ニ係ルヲ以テ  
大清政府ニ告ケルニ此一案ノ起由ト我趣意ノ  
向フ所トヲ以テシ以テ我政府ノ大清政府ト誠  
ヲ推メ隠スコト無ク惻誼貳ツ無ク意ヲ表スルヲ  
須要トス使臣宜ク此意ヲ体シ辭命ヲ愆ルコト勿  
レ

明治八年十一月二十日

奉勅

外務卿寺島宗則



大清北京在留公使

我  
朝廷為對  
大清國朝廷重親睦  
大清國衙門報知我  
我德川氏與朝鮮國  
政革新我朝廷依禮  
作而不受爾後發使  
森山從朝鮮東萊府  
幹使齋抵東萊府應  
我  
朝廷若期發往詎料



受書致森以空就歸途但以彼未有顯然相絕之語  
我仍專有期好意相諧矣乃九月二十日大清日○月  
我火輪船一只向牛莊駛往在朝鮮江華島邊將需  
淡水暴為陸地砲台所轟擊勢逼危急只得自防我  
朝廷不知朝鮮政府心意所在或疑出于其地方官  
弁擅興暴舉而猶望隣誼之不泯今發遣特命全權  
辦理大臣欲使向朝鮮政府一面問江華島事求所  
被屈辱之補償一面益表懇信獲彼要領言歸于好  
以續三百年之旧交要主妥便結局不敢好多事雖  
為未保朝鮮國果作平穩辦法不免將兵船護使臣  
然亦知彼无辭于深相拒也但以事係隣並  
須要明言

大清國朝廷以此一案起由暨我趣意之所向以益

表我朝廷與

大清國朝廷推誠無隱惻誼無貳之意使臣宜體此  
意辭命勿愆

月 日

奉勅 外務 卿



口陳書

我朝廷現派一特命全權辦理大臣由江華灣前往  
將直進京城為此我外務卿專遣本職事前相  
報更將使命旨意稟別函開具以便豫相通知

右望吳別函轉達 京城不錯

明治八年十二月

大日本國理事官廣津弘信印

另具者

我朝廷中興之際專書相告意寔續舊好再後使出  
三四經歲七八無一字一函見以相報客歲我外務  
官負森山從東萊府使朴獲更修外務卿書契來  
抵東萊相接之約我朝廷如期發往詎料違約不



接乃我九月二十日我火輪船往向牛莊過江華島  
將抵江口需水暴被砲擊我朝廷不知貴國心  
意所在未忍敢以兩國之好付之塗泥茲以陸軍中  
將兼參議黑田為特命全權辦理大臣派遣貴國  
的確查問必欲獲要領期我明治九年一月中旬貴國  
本年十二月十五日至廿四日直向江華島前往若不得接答將直  
進京城要不容有依違遷延之慣法然亦匪寇婚  
媾言歸于好但以使事重大而邊陲兵民情事已測  
故令護

使臣以兵船非不得已也

右為 辦理大臣使命大旨本職茲先敷陳專  
便豫相通知若其間辨持係 辦理大臣專對  
之任非本職所敢于涉也

貴國特命全權辦理大臣由江華灣前往 使命旨  
意梗概敷陳別函與先報口陳書之捧出非任官自  
專故吳為騰書呈納本府以速達 京師之意仰稟  
計料而元本之捧出事兼本府之教更為回報矣  
俯諒是希

乙亥十一月二十二日

訓導玄普運印

使道教內別函及口陳書旨意已為轉達京司而元  
本則不敢自專捧出待 京司回下更為相報之意  
為教故茲仰陳 俯諒幸甚

乙亥十一月二十五日

訓導玄普運印



朝鮮國別差李潛秀ニ付スル口陳書

我

朝廷派辦理大臣前往

貴國一事前者我外務卿遣理事官豫相告知茲  
我特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官  
黑田清隆特命副全權辦理大臣議官井上馨已到  
對馬將向江華島前往會商于  
貴國秉權大臣若 大臣不出接須要直進 京城  
但時正嚴冬風浪阻程其達該島之期或在七八日  
後也

右更轉申京城

明治九年一月十五日

館長代理

外務四等書記生山之城祐長



水谷如等書送至山二版

歌方九歌

南陽府使應接概畧  
一月廿七日南陽府下海灣停泊時該府使姜潤  
日進艦到來左ノ書單ヲ由ス  
白米 五石  
牛 壹頭  
猪 五口  
鶏 貳拾首  
醬 壹壺  
酒 三壺  
南陽府地方官姜  
同艦即之ヲ玄武丸ニ報ス大臣官本小一收  
昌業ヲ入往之ニ接セシム乃チ浦瀬裕ヲ率  
日進艦ニ抵リ府使及士人金鍊五書記官一名

南陽府使應接概畧

一月廿七日南陽府下海灣停泊時該府使姜潤

日進艦到來左ノ書單ヲ由ス

白米 五石

牛 壹頭

猪 五口

鶏 貳拾首

醬 壹壺

酒 三壺

南陽府地方官姜

同艦即之ヲ玄武丸ニ報ス大臣官本小一收

昌業ヲ入往之ニ接セシム乃チ浦瀬裕ヲ率

日進艦ニ抵リ府使及士人金鍊五書記官一名



ヲ延テ船海上行以ム彼レ我ノ来状ヲ問ヒ且云  
フ過日已ニ来ル見ル可キ者ナリトニ連日ノ風  
浪ニ阻テラレ遅延今日ニ至レリ一行平安ナル  
ヤ我答云是向ニ貴政府ニ報スル所ノ我朝廷ヨ  
リ差遣セラルル、黒田井上両大臣一行ノ船艦ナ  
リト且其来問ノ厚意ヲ謝ス彼又問フ貴艦ノ内  
三隻ハ既ニ當地ヲ解纜セリ知ラス何ノ地方ニ  
向ヒ去リシヤ我答フニ隻ハ江華島水路ヲ測量  
セシカ為メ先發セシナリ一隻ハ淡水ノ在ル所  
ヲ求メシカ為メ近岸ニ到リシナラン我又云今  
物品數種ヲ惠贈セラルル、昔ヲ羨ク深ク厚意ヲ  
領ス然ルニ我諸艦已ニ數月ノ糧食ヲ貯蓄シ聊  
カ欠乏ヲ憂ナシ且地方ヲ煩スハ實ニ心ノ安シ

セサル所ナレハ受領スル能ハスト彼之ヲ受ケ  
ンフヲ懇請ス我固ク謝シテ之ヲ卻ク



江華府地方官并吳慶錫等問情概畧

一月廿八日孟春艦江華江南口測量ノ節草芝鎮  
前ニ於テ韓船一隻船首ニ問情ト題シタル旗ヲ  
掲ケ來ル艦長韓人ニ名ヲ延テ船ニ上ラシム草  
芝衙前趙義永公吏朴外均ト稱シ云此嚴冬ニ當  
テ遠ク大洋ヲ涉ル一行平穩柴糧匱乏ノ憂ナキ  
ヤ地方官將ニ勞問セントス先ツ我們ヲシテ通  
知セシム既ニシテ江華府判官四品朴齊近京職  
五品官高永周至ル我告ルニ水路ヲ測量スルヲ  
以テシ其厚意ヲ謝ス談話少時ニシテ去ル  
二十九日司譯院堂上官吳慶錫訓導玄晉運船ニ  
來リ云余等朝命ヲ奉シ此ニ來レリ我朝大臣ヲ  
派シ貴國大臣向テ所々地ニ就テ迎接セント欲



不知ラス貴國大臣今何處ニ在ルヤ我告ルニ  
大臣碇泊ノ處ヲ以テス尋テ韓船一隻地方官ノ  
書ヲ持シ来リ鷄三十首秀魚十尾ヲ贈ル我固辭  
シテ受テス

喬桐府將校等問情概要

一月三十日矯龍艦江華江北口測量ノ節喬桐前  
洋ニ於テ韓船一隻船首ニ問情ト題シタル旗ヲ  
立テ来ル安田定則其船ニ上リ之ニ接ス彼我々  
來狀ヲ問フ我水路ヲ測量スルヲ以テ之ニ答フ  
其接スル者三人喬桐府將校李祚宇劉同秀營吏  
李冕琦ナリ江華府下ニ抵レハ又彼ノ問情船來  
ルニ逢フ安田定則彼船ニ到ル譯官李應浚出テ  
接シ問情ノ意ヲ述フ我モ亦來狀ヲ告ケ談話少  
時ニシテ別ル



吳慶錫玄普運應接概畧

一月三十日我諸艦大阜島側ニ停泊ノ時司譯院  
堂上官吳慶錫訓導玄普運來ル宮本小一森山茂  
日進艦ニ於テ之ニ接ス浦瀬裕通譯彼云余等來  
問スル所以ハ向キニ釜山ヨリ貴國理事官廣津  
ノ口陳書到リ我カ朝廷已ニ貴國大臣我國ニ差  
遣セラル、ノ意ヲ領セリ尋テ館長代理山之城  
ノ口陳書來リ其既ニ途ニ在ルヲ知ル貴國大臣  
果シテ此ニ來レルヤ否ヤ特ニ朝旨ヲ奉レ尋問  
スルナリ我答云黒田井上兩大臣既ニ無恙此ニ  
達セリ但江華島ニ進行スルノ水路ヲ詰レセサ  
ルカ故ニ先ツ測量ヲ為シ然ル後啓行セントス  
ト是ニ於テ南陽府使ニ贈ル、キ所ノ口陳書ヲ



出云此書ヲ府使ニ面遞シ事狀ヲ告ル苦ナリ  
シカ其所存ノ地方ヲ知ラス且連日ノ風浪ニテ  
今ニ遲延セリ幸ニ西君ニ會ス此意ヲ領セラレ  
併セテ請フ府使ニ轉達セラレシト彼諾ス  
而ノ玄云前キニ廣津公ニ面接シ口陳書ヲ受ケ  
テ上京既往ノ情實ヲ具陳セシニ我カ朝廷大ニ  
了解スル所アリ故ニ本月二日ヲ以テ釜山ニ赴  
ハカントス然ルニ貴船既ニ至レリト聞キ其事  
ハ相止メ此ニ來レリ吳モ亦私ニ衷情ヲ述テ云  
フ身屢清國北京ニ抵リ上海香港邊迄モ遊歴シ  
畧外國ノ事情ヲ知ルヲ得タリ我國貴國ト情意  
阻隔ノ事ハ年來慨歎ニ堪ヘス建言ノ趣モアリ  
シニ我國外國ノ事情ニ疎ク採用ヲ蒙ラス終ニ

今般ノ事ニ至レリ今命ヲ受ケ此事ニ從フ當ニ  
朝廷ニ詳稟シ順成ニ至ルヲ謀ルヘシ因テ大臣  
接待ノ禮如何カ之ヲ慮シ然ル可キカヲ商ル我  
我國ノ使臣ハ頭等欽差タルヲ告ケ接待ノ禮如  
何ニ至テハ吾カ輩ノ與リ知ル所ニ非サルヲ答  
フ玄又浦瀨ニ從前己カ周旋ノ至ラサルヲ分疏  
シ罪ヲ自國ニ得セシムル勿ラントテ請フ其他  
款話時ヲ移シテ去ル其口陳書モ亦之ヲ持シ歸  
レリ



口陳書

昨舟中晤次詢及我二隻船開行之事本員答云該船為探江華島水路先發且我使船進江華島一事業經我官吏在釜山兩次告知本員亦已述及今特欲詳報者談二船分從江華前江南北二口而進擇衆艦可以航往之處俟其回報衆艦悉行前往請貴府速以此意轉知江華府

明治九年一月二十八日

大日本特命全權辦理大臣隨員







森山茂安田定則江華府ニ於テ應接概畧  
二月五日大臣森山茂安田定則等ヲ江華府ニ遣  
リ旅館ノ準備等ヲ為サシハ森山等府ニ抵リ留  
守趙秉式ニ面シ之ヲ述フ趙答フルニ身地方官  
タルヲ以テ接待ノ事ニ預ラス大臣来リ到ルヲ  
待テ之ヲ報スヘキヲ以テス我昨日吳慶錫等ニ  
聞ク所ヲ以テ之ヲ詰ル彼云我々大臣向キニ一  
夕ニ此地ニ来ル貴船未々至サル故ニ直ニ貴船  
ヲ訪ハントテ通津ニ到レリ然レ共今明日ニハ  
必ス又此地ニ来ルヘシ我云昨日吳氏ノ告知ニ  
ヨリ貴大臣此地ニ在ルヲ信シ此ニ来ル今此ノ  
如シ空ク歸ル可ラス此ニ留リ其来着ヲ待ツヘ  
シ請フ速ニ此事ヲ貴大臣ニ報セラレヨ彼諾ス

Blank page with vertical lines for writing.



是於二氏之ヲ我カ大臣ニ報ス午後三時ニ  
至リ彼報シテ云ク兩大官至ル副官別館ニ於テ  
貴官等ニ面接スヘシト暫クアリテ玄昔運李熙  
聞未リ曰貴國大臣迎接ノ手續ハ必シモ面晤ヲ  
煩ワス小官等ト商議又ハ書翰ヲ以テセハ如何  
我肯テ聽カス必ス副官ニ面スルヲ請フ彼之ヲ  
副官ニ傳フ少クアリ報シテ云貴意ニ應シ面接  
スヘシ請フ暫ク座席ヲ設クルヲ待テ森山等延  
待時ヲ移ス彼又報シテ云副官疾アリ相見ル能  
ハス請フ明日ヲ待テ我其反覆ヲ切責ス彼詳解  
已マス我彼ノ紹々ヲ須ヒス自ラ副官ノ處ニ到  
ラントス於是彼已ムヲ得ス迎テ副帥營ニ入ル  
副官尹滋承出テ接ス我大臣不日上陸アルヘキ

ヲ陳シ旅館ヲ借ルヲ請フ尹之ヲ諾シ明朝迄ニ  
手當ヲ為スヘシト答フ是ニ於テ二氏其夜江華  
府ニ宿シ翌六日副帥營及外捕廳ヲ以テ旅館ト  
スルヲ約シ本艦ニ歸レリ



宮本小一森山茂江華府留守へノ書翰  
茲ニ昨九日我々大臣率ユル所ノ儀仗兵員ヲ分  
遣シ草芝鎮ニ於テ岸ニ上リ陸路ヨリ江華府ニ  
前赴ス該兵數名搭メ脚艇ニ在リ將ニ大艇ヲ離  
レントスルノ際偶々誤テ纜ヲ失シ舟ヲ覆ヘス  
因テ小艇數隻ヲ發レテ營救ス時ニ潮流迅急内  
兩名ヲ失シ多方撈索スレド得ス誠ニ憫ムヘシ  
ト為ス切ニ望ム 貴府速ニ此事ヲ將テ南陽仁  
川等ノ各地方ニ告知シ流屍漂テ至ル有ラハ請  
フ即テ示知セン丁ヲ應ニ即テ員ヲ派シ該地ニ  
就キ尸ヲ領スヘシ其營葬等一切ノ事ノ如キハ當  
ニ時ニ就テ相商ルヘシ該弁姓名服容等另單ニ  
開具シ以テ按照ニ便ニス敬具



大日本特命全權辦理大臣隨員

明治九年二月十日

外務權大丞森山茂

外務大丞宮本小一

江華府留守趙秉式貴下

石渡 駒 治

該員齡十七歲十月溺時著短帽服戎服

哆囉絨深藍色當肩

聚散金絲領及袖緣青色褲兩邊暨有朱條

背負行囊佩皮袋携銃及劍

着皮靴

江口 麟 太郎

該員齡二十二歲九月服色同前

譯 漢 文

江華府留守趙秉式貴下

茲昨九日我大臣分遣所率儀仗兵員於草芝鎮上岸由陸路前赴江華府該兵數名搭在脚艇將離大船之際偶誤失纜覆舟因發小船數隻營救時潮流迅急內失兩名多方撈索不得誠為可憫切望 貴府速將此事告知南陽仁川等地方若有流屍漂至請即示知應即派員就該地領尸若其營養等一切之事當就時相商該弁姓名服容另單開具以便按照敬具

大日本特命全權辦理大臣隨員

明治九年二月十日

外務大丞宮本小一

外務權大丞森山 茂



江華府留守復函  
貴兵士二人滄漂事聞甚驚慘極尸一歎謹當另飾  
沿海各要期於斯速舉行而海波浩漫慮或有漂蕩  
無跡之歎是所悶菀耳不備  
丙子正月十六日  
江華府留守趙秉式

江華府留守復函  
貴兵士二人滄漂事聞甚驚慘極尸一歎謹當另飾  
沿海各要期於斯速舉行而海波浩漫慮或有漂蕩  
無跡之歎是所悶菀耳不備  
丙子正月十六日  
江華府留守趙秉式

江華府留守趙秉式

Blank lined area for the reply on the left page.



二月十日兩大臣江華府副帥營ノ旅館ニ入  
ル即チ接見大官申摠ノ旅館ヲ訪フ申摠及  
七副官尹滋養迎接ス浦瀨裕通譯官本小一  
森山茂陪坐

大臣

本日該所ニ到着セシニヨリ直チニ來訪セリ  
申

大臣

萬里ノ波濤恙ナク來航セラレ敬賀ハ  
貴國王殿下安寧諸官并皆無事ナルヤ  
申

大臣

一体ニ無事ナリ

*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*



過日來旅館等ノ事ニツキ頗ル貴意ヲ煩ス多

謝

申

我國ノ貴國ニ於ル久シク交誼ノアルアリ

此等ノ事固ヨリ當然トス焉ソ謝辞ヲ煩サ

シ

大臣

本日ハ相見ルノ禮ヲ修ムル為メニ來訪セリ

大請ヲ相辭シテ帰館セン

申

本大臣等モ亦捧趨シテ答禮スヘシ

是ニ於テ兩大臣館ニ歸ル暫クシテ申尹來

訪兩大臣迎接ス浦瀨裕通譯安田定則小牧

昌業鈴木大亮陪坐

申

過刻ハ尊問ヲ辱フレ感謝ニ堪ヘス且貴大

臣ノ安着ヲ賀ス

大臣

早速答禮ヲ煩ハシ厚意多謝ス

申

重テ捧送ヲ期ス請フ辞シ去ラン

大臣

貴諭ヲ領ス

右ニテ談畢リ別レ去ル



明治九年三月十一日午後一時黒田大臣并  
上副大臣朝鮮國判中樞府事申樞都揔府副  
揔管尹滋永ト江華府西門内鍊武堂ニ於テ  
談判浦瀨裕通譯官本小一森山茂小牧昌業  
陪坐相見ルノ禮畢ソテ大臣茂ヲシテ意ヲ  
傳ヘシム

茂

此坐ハ過日申通シ置キシ如ク兩國重大ノ  
事件ヲ論スレハ貴大臣隨員五名ノ外ハ盡  
ク之ヲ避ケシメヨ

細ニ談話セシ席ヲ前メテハ如何  
彼諾シテ人ヲ退ケ席ヲ前ム

申



聞ク前日貴國兵士二名頂山崎下ニ於テ溺  
死セシト驚歎ニ堪ヘス速ニ各地方ヘモ嚴  
達セリ浮尸ヲ得ハ直ニ之ヲ報知スヘシ

大臣

厚意多謝

申

過刻仕官ヨリ請フ所ノ兵卒各處ニ遊歩セ  
サル去々ノ儀速ニ御下命ナサレ感佩セリ

大臣

兵卒多シ若シ不行届ノ事アラハ幸ニ之ヲ告  
ケヨ過慮ヲ勞スル勿レ

申

貴大臣ノ意ヲ用ル此ニ至ル深ク感謝ス

大臣

今日ノ會晤ハ乃チ我等使命ノ意速ニカ為  
ナレハ請フ之ヲ陳セン

申

敬養

大臣

我皇帝陛下兩國三百年ノ旧交ヲ敦フスルノ  
意ヲ以テ貴國接待ノ大臣ヘ細ニ晤談イタス  
ヘシト鄭重ニ命セラレタリ

申

兩國三百年來ノ交誼誠ニ廢ス可ラサルナ  
リ今更ニ旧交ヲ敦フスルノ言ヲ養テ殊ニ  
感謝ニ堪ヘス



大臣

使命ノ大意ハ向キニ我外務卿理事官廣津弘  
信ヲ派シ之ヲ報セリ  
申

此事已ニ兼知セリ

大臣

我國王政維新ノ始書ヲ貴國ニ贈リ其由ヲ告  
メケ旧好ヲ修ム然ルニ貴國之ニ接セス其後屢  
々使ヲ出セシカ共今ニ至リ何等ノ回答ナシ  
兩國情意ノ洽カラサル此ニ因ルニ非スヤ  
申

兩國間ニ從來慣習ノ別格アリ其別格上ヨ  
ク大ニ情意ノ阻隔ヲ生セシ故アラシ今更闕忙

セリ  
ノ  
意  
ナ  
リ  
ハ  
心  
痛

大臣

之ニ加フルニ先般我汽船雲揚艦清國牛莊地  
方ニ航スル途申水ヲ需メシカ為メ草芝鎮ニ  
到リシニ遽ニ砲撃ニ遭ヘリ此又交情ヲ洽タ  
ラサルヨリ起リシナリ  
申

江華島ハ京城接近ノ地故ニ守衛ヲ嚴ニス  
貴國徽章見本ハ既ニ我政府へ御差出レ相  
成シナレモ未タ地方へハ達シ置カス尤其  
船ハ黄色ノ旗ヲ立タレハ全ク別國ノ船ト  
認メ防守ノ為メ砲声ヲ發セシナリ

大臣



黄色ノ旗ヲ立テシトハ疑フヘシ正シク日本  
國旗ヲ掲ケタルニ相違コトナシ此件ハ逐次  
却談判ニ及フヘシ  
申

地方ヨリハ黄旗ナリシ由ヲ届ケ出タリ誤  
リ認メタルカ尤貴國旗章見本ハ未ダ江華  
一達知セズ且其際異様ノ船舶近海へ來往  
スルノ説アリ故ニ貴國船ナルヲ知ラス砲  
声ヲ發シタルナリ今般廣津ヨリノ報ニテ  
初テ貴國船ナリシヲ知レリ

大臣

我國支那ト條約ヲ結ビシ以來汽船ノ貴國沿  
海ヲ往來スル殊ニ繁シ故ニ誤認等ノ害ナキ

大  
ト要スル為ノ國旗見本ヲ貴國ニ交付セシハ

已  
已悉クシ

申

貴國旗見本我朝ニ達シタルハ確乎タリト  
雖此全國へ公布セサルハ兩國交際ノ事未  
タトガチラサル処アレハ外務卿ノ書契ヲ  
取ルノ事ニ至テ後公布スヘシト思ヒシ  
ナリ今地方ニ於テハ別ニ公布ヲ聞カス忽  
チ黄色ノ旗ヲ見發砲セシナラン然ラサレ  
ハ平常商船等ノ海上風波ノ難ニ罹ルノ事  
アレハ直ニ之ヲ救恤スルヲ為ス况ヤ貴國  
軍艦ニ謂レナク無禮ヲ加フ可クヤ

大臣



六 縱令交際ノ一十分ナラス書契ノ往復ハナキ  
トモ兩國敵視スルニ非サレハ暴撃スルノ理  
ナシ故ニ誤認等ノ害ヲ防クカ為メ故ラ通  
知シタル徽号ヲ人民ニ告知セサルハ事等閑  
ニ属セリ

申  
當時其船若シ我國ニ留リ果シテ貴國船ナ  
ルヲ知ラハ蒙ルハ道モアルヘキニ其船ハ  
永宗城ニ至リ火ヲ放テ兵器ヲ奪テ直チニ  
歸リ去リシニヨリ全ク外夷ノ所為ナルト  
思ヒシナリ自後此等ノ事出来セサル様注  
意イタスヘシ

大臣

此等ノ事件ハ畢竟兩國情意ノ阻隔ヨリシテ  
生スル所ナレハ今回和好ノ大局ヲ全フセハ  
向來此ノ如キ不都合ハアルマシ今永宗城云  
々ノ件ハ當時該船江華府ニ到リ其故ヲ問ハ  
ント更ニ國旗ヲ三桅ニ掲ケ進往セシモ砲撃  
益急ナルニヨリ不得已退去困難ヲ極メ防禦  
ノ術ヲ尽シタルナリ是ハ我國ヲ敵視セラレ  
シニ當レリ又我國ノ書問ニ應セラレサル已  
ニ八箇年ヲ経タリ何レモ其順序ヲ逐テ書類  
ヲ差出し談判ニ及スヘシ

大臣

其御書類ヲ持見イタスヘシ



我等ハ貴國ト使事ヲ議スルノ全權ヲ委付セ  
ラレタリ貴大臣モ亦然ルヤ

申

貴大臣ハ他國へ出使ノ事ナレハ左モアル  
へシ我國ニ於テハ使ヲ他國ニ遣ルハ格  
別令般ハ近京ノ地ニ在テ接對スレハ時々  
稟報ヲ經テ公幹ヲ主理スヘシ

大臣

乍然發許カ御委任ノ權限アルヘシ

申

貴大臣ヲ接待スヘキノ命ヲ奉シタレハ貴  
大臣ノ議スル所何等ノ事ニ及フカ計リ難  
シ故ニ未タ其界限ヲ定メ得ス

大臣

然レハ兩國交際ノ事務ヲ商議スルニ當テ條  
ヲ逐テ區分セハ必ス貴大臣ノ專對シ得ヘキ  
ト否サルトノ別アラシ

申

我輩ノ派出セシハ唯貴大臣ヲ接待スルノ  
命ヲ受ケレシノミナレハ談判ノ事件ニヨリ  
京師ニ報シ霞分ヲ仰クハ今日ノ職分ナリ

大臣

初メ釜山ヨリ貴國ノ東樞大臣ニ面商スヘキ  
ヲ報知セリ然ルニ今貴大臣出接シテ委任ノ  
權ナシト云フハ心得難シ

申



我國ニ於テハ使臣ニ付スルニ全權ヲ以テ  
スル事ナシ此地ハ京城ヲ距ル遠カラサレ  
ハ御談判ノ件ニヨリ奉報スルト否トテ區  
別シ時々相商スヘシ

副大臣

向キニ貴大臣云フ從前兩國情意ノ阻隔スル  
甚ク憫忙スト是レ貴朝廷ノ意ナルヤ將タ貴  
大臣ノ意ナルヤ

申

滿廷ノ君臣皆憫忙ス然レモ此ニ頗曲折ア  
リ言ハスレテ止マシカ若シ聞クテ改セハ  
請フ之ヲ説カン

副大臣

國王殿下憫忙諸大臣モ亦憫忙ストナラハ既  
往ノ事強テ之ヲ聞クヲ要セス

尹申

強テ之ヲ説クヲ要セスト雖トモ其大畧ヲ  
陳セン

申

曾テ日本ノ八戸頭叔ナル者ノ清國ニ在ル  
ヤ貴國兵ノ出レテ我國ヲ征シ進貢ヲ責シ  
トスルノ謀アルヲ説ク此事新聞紙ニ載セ  
各國ニ宣布セリ故ニ清國政府之ヲ我國ニ  
咨問ス我國正ニ疑懼ノ際貴國維新ヲ告ル  
ノ書偶々至ル書中皇勅等ノ字アリ且書体  
旧例ニ違フ是ヲ以テ益疑惑ヲ生シ以テ情



意阻隔ヲ致ス然レモ今日ニ至テハ事皆永  
解セリ今談從前ノ事ニ及フ故ニ之ヲ説ク  
ノミ

副大臣

貴國內情如何ハ我カ與リ知ル所ニ非ス各國  
互ニ禮ヲ以テ相待シ書問必ス報スルハ交際  
ノ道ナリ貴國ノ我國ヲ待スル数次ノ書簡ハ  
年ノ久ヲ經ルモ一言ノ回報ナキハ何ノ故ソ  
申

貴諭ノ如ク兩國ノ阻隔ヲ致セシハ我ヨリ  
之ヲ為セリト雖モハ戸説ク所ノ件ハ各國  
ニ流傳シ人々貴國ノ我國ヲ辱ムルヲ愧憤  
スルノ際書契例ニ違フヲ觀テ益疑惑ヲ生

セシハ向ニ説ク所ノ如シ然レモ事既往ニ  
屬ス姑ク置テ論セス今後親睦ヲ厚フシ以  
テ情意阻隔ノ憂ナカラシムヘシ

副大臣

勿論強テ既往ヲ論スルニ非スト雖モハ戸ノ  
説ニ因テ疑惑ヲ生セシハ貴國ノ自カラ為ス  
所ニシテ我政府ノ知ル所ニ非ス若シ人民ノ  
説ヲ取テ交際ノ事ニ関涉セシモハ我國或ハ  
征韓ノ説ヲ唱フルモノモアルハシ貴國人民  
或ハ政府ヲ怨望スル者アルモ計リ難シ各政  
府相交ルノ言ニ非サレハ憑テ以テ證トス可  
ラス故ニ此等ノ疑惑ヲ以テ兩國ノ和ヲ妨ク  
ルハ今既ニ悔悟セラレシナラシ



申

我自ラ此疑惑ヲ起セシトノ義實ニ然リ但  
日本人民ノ此ノ如キ説ヲ為シ遂ニ新聞紙  
ニ載スルニ至リシハ實ニ恨ムヘシ然レモ  
此事今已ニ氷釋ス今後益和好ヲ謀ルヘシ

副大臣

今貴大臣頻リニ新聞紙ヲ提起ス夫レ新聞紙  
ハ政府ノ関知スヘキ者ニ非ス各國ノ新聞紙  
或ハ其君主ノ非ヲ指斥シテ之ヲ掲クル者ア  
リ若シ新聞紙ヲ以テ交際ノ事ニ関涉セハ各  
國相争ヒ干戈絶ユルナカラシ此等ノ事ニ疑  
ヲ懷キシヲ悔悟セラルハ當然ナリ

尹申

今日ヨリ之ヲ觀レハ實ニ笑フヘシト雖モ  
當時ハ談件ノ新聞紙ニ載セタルヲ聞キ耻  
辱ヲ外國ニ招ケリト思ヘリ向後ハ敢テ之  
ヲ信セス貴國ト必ス旧好ヲ修メ兩國ノ交  
リ誠信敬禮ヲ以テ旨トス可シ

大臣

今副大臣ノ陳セシ如ク新聞紙ハ信スヘキ者  
ニ非ス若シ一々之ヲ信セハ兩國ノ和好ヲ破  
リ終ニ数百万ノ生靈ヲ塗炭ニ陥ルニ至ラン  
既往ハ置テ之ヲ論セスト云ト雖モ向後又此  
ノ如キ事アルモハ兩國ノ交和必ス保ツ可ラ  
ス實ニ歎息ニ堪ヘス且従前兩國関涉ノ事ハ  
都テ証據トスヘキニ案アリ彼ハ戸カ虚説



不知キモ當時已ニ宗氏之ヲ辨明セリ  
申  
當時ハ新聞紙ノ何物タルヲ知ラス宗氏ニ  
照會セシニハ戸ハ日本人ニ非サル旨回答  
アリシヤニ覺ヘタリ

大臣

右ハ當時往復ノ書面ヲ奉示スヘシ  
前年森山ノ貴國東萊府使朴ト約セシ事件遂  
ニ背反ニ至リシハ我カ朝廷甚不快ナリ

尹申

ハ戸一条ハ内情ヲ明シ陳述シタルコトニ  
テ向後新聞紙ニ關係スルコトナケレハ別  
ニ書面ヲ受クルヲ欲セス

大臣

念ノ為メ一應兼リヲキタシ從前兩國情意阻  
隔我ノ書問ニ答ヘス八年ノ久ヲ經遷延今日  
ニ至リシハ非埋ト思ハルヤ

申

戊辰以來書契ノ件從前之ヲ拒ミタル者今  
悉ク永釋セリ向後之ヲ拒マズ異議ナク領  
受スヘシ

副大臣

然ラハ我國ノ情意既ニ能ク相通ス貴國ノ之  
ヲ拒ミシハ今悔悟セラレシナラン

尹申

我等貴大臣ヲ接待スル一从久使臣ナレハ



悔悟ノ字面ハ説キ出シ難シ從前ノ疑團都  
ラ氷解セシナリ

副大臣

然ラハ此ノ如キ事件友國ニ對シ至當ナルト  
思ハルヤ

申

既往ノ事ハ必シモ是非ヲ論セス今後ノ和  
好ヲ謀ラント已ニ之ヲ説ケリ

副大臣

事ノ是非ヲ判セストハ其意ヲ得ス今姑ク兩  
國交際ノ事ヲ以テ之ヲ論セス惟貴大臣自ラ  
反省セヨ朋友相交ル約ニ背キ信ヲ失フハ理  
メ三合フトスルカ悖ルトスルカ

申

向ニ數々説ク所ノ如ク戊辰以來新書契等  
ノ意都テ之ヲ拒ムナレ但シ前日ノ非ヲ陳  
謝スルハ本大臣ノ敢テ為スヲ得サル所ナ  
リ

大臣

此儀ハ何分御確答コレナキニ付姑ク之ヲ置  
ク今一應雲揚艦ノ事ヲ問ハン過刻貴大臣云  
フ雲揚艦ハ守兵其日本艦ナルヲ知ラスレテ  
誤テ之ヲ砲撃スト貴朝廷之ヲ何トカ謂フ  
申

貴國艦ナルヲ知ラスレテ發砲ス故ニ守兵

罪ナシ



大臣

然ラハ其誤撃ニ遭シハ如何  
申

既ニ貴國船ナリシヲ知レハ我朝廷宜シカ  
ラサレ事ヲ為セシト思フナリ

大臣

今日ハ時刻移レリ之ヲ明日ノ會晤ニ讓ルヘ

申

諾

大臣

談判ノ事件西意徹底シ難キ儀モ可有之互ニ  
隨負ノ中然ルヘキ者ヲ擇ヒ細目ヲ商議セシ

大臣  
申  
大ニ意義貫通スル様イタシタシ

決議ハ兩國大臣ノ面晤ニ付スヘシ隨負ヲ  
以テ細目ヲ議問スルハ異議コレナシ

大臣

決議ハ固ヨリ然リ但隨負ノ應接ハ談判上意  
義ノ通シ難キ者等ヲ質問メンカ為ナリ貴隨  
負ハ何某ヲ出サルヤ此方ヨリ差出ス者モ  
姓名ヲ申上置クヘシ

申

我ノ隨負ハ我等ノ官爵ニ對シ隨從セラレ  
タル者ニシテ朝命ヲ奉シ公務ヲ管スル者  
ニ非ズ貴隨負トハ自カラ差別アリ如何シ



テ可然我

大臣

我國勅任官ヲ以テ大臣トシ其次ハ奏任官ト  
ス我カ隨員ハ公務ヲ行フモノニシテ奏任ノ  
輩ナリ卑職ニ非ス故ニ副官ニ接シテ可ナラ  
ズ我朝命ヲ奉ニ貴大臣ニ接待ス貴國隨員ニ  
接スル能ハス

申

任官等ハ公務ニ関スル者ナレハ隨員ニ應  
接セハ如何

大臣

相當セス

申

貴國隨員ト異ナレハ相當ノ者コレナシ要  
務アラハ任官等ヲ貴館ニ召ヒ其意ヲ本大  
臣ニ轉知セラルヘシ

大臣

諾

談畢ル彼酒ヲ供セント請フ大臣之ヲ辭ス  
彼固ク請テ已ラス少アリテ酒肴羅列シ樂  
ヲ階下ニ奏ス五時帰館



明治九年二月十二日午後第一時黒田辨理  
大臣井上副辨理大臣朝鮮國大臣申憲尹滋  
兼ト江華府鎮撫保釐營門前執事廳ニ於テ  
談判浦瀬裕通譯官本小一森山茂安田定則  
小牧昌業荒川徳滋陪坐相見ルノ儀畢リテ  
申

貴兵士溺死ノ儀京師へ上申シタルニ朝廷  
ニ於テモ甚タ氣ノ毒ニ存スル旨申来リリ  
尤地方へモ普告致シヲキタル所未タ流屍  
ヲ得タル報知無之

大臣

貴朝廷ノ厚意別テ辱ナシ

大臣

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



昨日談判ノ續キヲ申上クヘシ是迄兩國情意  
阻隔セシハ八戸順叔ノ説新聞紙ニ記載スル  
ニヨリ貴國民情紛紜ノ次第モ養知セリ然ル  
ニ新聞紙ノ信スルニ足ラサルハ既ニ昨日委  
詳陳述セシ通ナリ我國維新以來ノ書問八年  
ヲ經ルノ久シキ一言ノ御答ヘエレナク我朝  
廷ニ於テ甚不満足ニテ既ニ國辱ヲ受ケタル  
上ハ其儘差置ク可ラストノ國論紛起我  
皇帝陛下深ク憂慮セラレ本兩大臣ヲ派シ兩  
國ノ情意ヲ通シ三百年ノ旧好ヲ修ムルヲ命  
セラレタリ然ルニ昨貴大臣ノ説ヲ聞クニ從  
前ノ阻隔ハ既ニ氷解セリト申サルレ氏此重  
大ノ事件唯氷解トノミニテハ其意ヲ得ス尤

從前ノ手續キ證據トナルヘキ書類悉皆持參  
セリ森山茂其事ヲ關知セシ者ニ付同入ヨリ  
委シク申述ブヘシ

即チ茂ニ命シ書類ヲ出シ明治元年以來ノ  
事件條ヲ逐テ陳述ス

大臣

只今森山ヨリ申上シ通ノ手續キナリ然ルニ  
唯新聞紙ノ事ヲ引キ内情分疏有リト雖氏夫  
ニテハ我朝廷へ稟報イタシ難シ何分發輝ト  
御答養リタシ

申

昨日新聞紙ノ事ヲ申上ケシハ數年阻隔ノ  
事ニ付畧内情ヲ明セシ迄ニテ今日ニ至テ



ハ前ニ書契等論辨セシ件モ最早異議コシ  
ナシ何卒向後兩國親睦ノ道ヲ御商量下サ  
レタシ

大臣

其儀ハ兼知セリ抑先年以來貴國我カ書契ヲ  
拒ク我カ使臣ヲ拒ミシニヨリ全國憤恨之ヲ  
不問ニ付ス可ラサルノ議起レリ輿情既ニ此  
ノ如シ廟堂ニ於テモ深ク配慮種々困難ノ情  
實アリ此儀ニ付今ヨリ四年前大臣数名議論  
合ハサルニヨリ解職セシ事アリ其一名ハ是  
非其黨一手ヲ以テ罪ヲ貴國ニ問ハントシ肥  
前佐賀ト云フ地ニ屯集シタリ尤海陸軍兵員  
ニ各心ヲ協セ問罪ノ舉ニ從ハント欲スル者

數多アリ佐賀ノ黨勢切迫ナリヨリ朝廷之  
ヲ鎮撫ノ爲メ大臣ヲ佐賀ニ遣セリ其人ハ即  
チ參議兼內務卿大久保利通ニテ一昨年台灣  
ノ事件ニ付辦理大臣ノ命ヲ奉ヒ清國北京ニ  
於テ同國政府ト談判セシ者ナリ然レニ佐賀  
ノ黨鎮撫ヲ受ケス遂ニ干戈ヲ尋ヌルニ至リ  
或ハ鋒鏑ニ罹リ或ハ刑戮ヲ被ル者少ナカラ  
ス事已ニ此ニ至ル而シテ朝廷之ヲ鎮撫シテ  
激動ニ至ラシメサルハ遽ニ兩國三百年ノ好  
ヲ破ルヲ欲セサルハ意ナリ今固兩國大臣ヲ派  
出セラルノ時モ海陸軍許多ノ兵ヲ付スヘキ  
ノ議アリシニ本大臣亦多兵ヲ率ユルヲ願ヒ  
サル旨ヲ論述セ其地情實尙巨細陳說セシ



ト欲スレ共其説長シ姑ク之ヲ略ス右ノ次第ニ有之從前貴國ノ無禮ヲ加ヘラレタル儀ハ相當ノ御挨拶兼リ度唯氷解トフニテハ本大臣復命ノ途ナシ何分既往ヲ答メストノ儀ニハ至リカタシ

我國貴國ト數年間阻隔ヲ生セシヨリ遂ニ貴國内情安カラサル次第ニ立至リ殊ニ佐賀變動ノ事件今日初テ拜兼貴朝廷ノ用意深厚ナル委細領兼感謝ニ堪ヘス我國ニ於テモ從前阻隔ヲ生セシメタル東茶府使ヲ遠竄シ訓導ヲ斬戮セシコトハ既ニ御兼知モアルヘシ尔供我等ハ唯接待ノ命ヲ奉シ

テ来リシナレハ卒爾ニ御挨拶モイタサレ申ス何レ朝廷へ稟報ノ上朝廷ヨリ貴大臣御復命相成丈ノ相當ナル御挨拶致スヘキナ

大臣

唯今貴國朝廷從前ハ非ヲ悔悟イタサレシ情實相分リタリ就テハ向後兩國ノ交情阻隔ヲ致サバル様永遠共守ノ條約取詰ヒ度宗氏ノ旧例ニテハ確乎タル條約モ無之ニヨリ又紛議ヲ生シ然ニ兩國不虞ノ難ヲ醸スモ測ラレズ現今ノ要務ハ條約ヲ議立スルニ在リ既ニ條約案ヲ取調ヘオケリ譯官ヲシテ之ヲ傳ヘ



申

此條約案并見致スヘシ

副大臣

此ハ國文ニテ記シタルハ譯官ヨリ申上ヘシ

此條約ハ貴國モ自主ノ邦ニシテ日本國同等

ノ權ヲ有スルニ付萬國交際普通ノ例ニ依リ

天地ノ公道ニ基ツキ取調タレハ先ツ猜疑ノ

念ヲ除キ御考案コレアルヘシ

浦瀬裕條約案ヲ披キ逐條講明ス

副大臣

不分明ノ件ハ御訊問有之ヘシ

申

譯漢文ヲ見シテ請フ

副大臣

即今差上ケス互換ノ節ハ自カラ相副ス可シ

申

譯官ノ説ク所ニテ大意ハ了解イタスト雖

トモ京師へ詳細報告イタスヘキニ付漢文

ヲ付セラル、義ハ出来間敷哉

副大臣

後刻ニテモ訓導ヲ旅館へ却差出シアラハ此

本ヲ以テ講明スヘシ夫ヲ書記イタシ可然

申

然ラハ後刻訓導等ヲ差出スヘシ

大臣

從來兩國情意洽ネカラサル久憂ヲ除カシカ



為メ此條約ヲ結ヒ互ニ鈐印交換シテ永遠遵  
守ノ證トスルハ即チ我カ 皇帝陛下本大臣  
ヲ派セラレタル人趣旨ナリ此後ノ御決答ハ預  
メ期ヲ訂セサル可カラサレハ議政ノ中ニテ  
モ全權ヲ有シタル大臣來接セラレ、カ又ハ  
貴両大臣更ニ委任ヲ受ラル、カ何レニモセ  
ヨ條約ヲ議立シ鈐印ノ運ニナル犬ノ大臣ニ  
引合申スヘシ

申  
義知セリ我等ハ貴國旧好ヲ継クノ意ハ万  
事旧格ニ遵ヒ取計ハント心得居シニ此條  
約書案ヲ拜見スレハ新規ノ箇條多ク我等  
固ク專決ヲ為シ難ケレハ先ツ大意ヲ京師ニ

奏シ然ル後此條約書案ヲ差出ス順序ニ相  
成ヘク我國ノ例格ニテハ擬令領議政來リ  
接ストモ獨斷ハ出來不申日ヲ期ヒテ決答  
スルハ出來申スマシ

大臣

從前宗氏ノ慣用シ來リシ例ハ彼我條約ヲ結  
ヒタルニ非ス決シテ永遠相安ンスルノ道ニ  
無之今斯條約ハ天地ノ公道ニ基ツキ万国普  
通ノ例ニ依リ取調タル者ナリ況ンヤ鄰國ノ  
交ニ於テハ尤モ欠ク可カラサル緊要ノ事ヲ  
リ若シ京師ハ奏間ノ上條約ヲ結フヲ肯ンセ  
サル片ハ即チ貴朝廷旧好ヲ継クノ意ナキナ  
リ



申

我國ハ從來貴國トノ交アリノミ外國へ通  
商シタル事ナキ故萬國交際ノ法モ不案内  
ナリ今愚見ヲ以テスレバ朝鮮が至テ貧國  
ニテ物産トテモ僅ニ棉及ヒ牛皮等ナレハ  
露々ニ開港イタスモ夫程ノ益アルマレハ  
然此ハ私見ナリ兎ニ角京師ニ奏問ノ上ハ  
可否ノ確答アルニシ

大臣

貴朝廷ノ御決答ヲ待ツヘシ尤此内ニハ従前  
用ヒ来リレ箇條モ多ク格別御評議ノ時間モ  
費サレル可ケレハ日ヲ期シオクヘシ然ルニ  
之ヲ朝廷ニ奏聞ノコト思考ニハ御西人ノ内

御上京ノ上奏聞可然五日間ニ可否ノ決答養

申

京師ニ於テ衆員會集協議ヲ尽スヘキニ付  
五日ニテハ御受合イタヒ難シ就テハ兩名  
ノ内上京イタスカ都合ヨク取計フヘケレ  
且貴大臣態々御待ノ処ニ万一期ヲ失シテ  
ハ不相濟事ナリ

大臣

精々御盡カハ可有之ナレト箇様ノ儀ハ預メ  
期日ヲ尅セスレテハ必ス遷延ノ憂アラシ  
申

縦令時日ヲ刻セズト奏決ニテ等閑ニイタ



不答無之精々抄取様可致ニ付一旬間ト  
定メ置タシ

大臣

何卒明日ヨリ七日ヲ期シ却答有之度

申

廷臣衆議ヲ經然ル後國王ハ奏聞ノ都合モ  
アレハ是非十日ト相願度

大臣

貴大臣上京相成ルナレハ船路ノ都合等モ可  
有之我小汽船一時却借渡可申右ニテ仁川等  
ノ地方へ航行有ラハ至テ迅速ニ達スヘク是  
非七日ニ相願ヒタシ

申

船路ノ却懸念下サレ辱ナレ然若シ七日  
ヲ期シ万一相後レテハ不都合ニ付十日間  
ト申上ケシナリ

大臣

當方モ都合アルニ付押テ七日間ニイタシタ

シ

申

京師ヨリノ決答或ハ七日前ニ相運フモ知  
レザレ共万一違約ノ事ニ至ラサル為メ却  
氣ノ毒ヲカラテ十日ヲ期シタシ

副大臣

今刻ハル所ノ期ハ條約鈐印完成ノ期ト思  
ルヤ又ハ可否ノ決答ノミカ



尹  
我等ハ全權ヲ委付セラレタルニ非ス京師  
ニ奏聞シテ可否ノ決ヲ仰ク可キナレハ固  
ヨリ十日間ニ完成スル能ハス可否ノ決答  
ノミニテモ我等上京スルカ或ハ急使ヲ發  
スルカ往復ノ時日ヲ費スヘシ故ニ十日間  
ト願フナリ

大臣

然ラハ貴意ニ應シ十日間ヲ期シ若シ夫違ニ  
回答コレナキ時ハ本大臣不得止歸國ス可シ  
然ラハ兩國交際ノ事終ニ相止ムニ至ルモ測  
ラレズ念ヲ為シ申置ナリ不審合ハ十日間  
尹

條約案中某条ハ可某条ハ否ト可否ヲ定メ  
申上ル事ニ可相成ト存スルナリ

大臣

可否ノ決答アリテ後我ヨリ論辨ノ件一々京  
師へ稟報セラルヘキ筈ナルヤ然ラハ又時日  
ヲ移スニ付相當ノ權ヲ有シタル人來接アル  
ヘシ

尹申

此儀ヲ奏聞ノ上ハ如何指令コレアルヘキ  
ヤ相分リ難シ我國從來全權大臣ヲ命スル  
ノ例ナシ

副大臣

然ラハ一々國王ニ奏聞セザレハ決セザルカ



申  
時々議政府ニ於テ評議ノ上議案ヲ國王ニ  
出し決ヲ取ルナリ

大臣

度々ノ御相談ニヨリ十日間ニ相定メタル上  
ハ万一期ヲ失シ回答ナキ片ハ曠日之ヲ待ツ  
能ハス直ニ帰國スヘシ既ニ五六日前本國ヨ  
リ督促ノ者来航セリ此義ハ返ス々々モ申述  
置ナリ

申

大臣 兼知セリ

右ニテ談畢ル五時四十分帰館

明治九年二月十三日午後一時黒田辦理大  
臣井上副辦理大臣朝鮮國大臣申徳尹滋養  
ト江華府鎮撫保釐營門前執事廳ニ於テ談  
判浦瀬裕荒川徳滋通譯宮本小一森山茂安  
田定則鈴木大亮陪坐相見ルノ儀畢テ

大臣

我々朝廷時ニ本大臣ニ命セラレ貴國ト舊交  
ヲ續キ和約ヲ議立スヘキ件々既ニ貴大臣ト  
談判ヲ經本日ヨリ十日内ヲ限リ貴朝廷ノ御  
決答アルヘキハ既ニ御約定致セシ通ナリ然  
ルニ我朝廷ヨリ該件督促ノ為汽船ヲ遣ヒ昨  
日濟物浦ニ達シタリ貴朝廷ニ於テ速ニ御運  
之アルニキハ勿論ナレ氏必ス一旬内ニ御決



答兼リ度猶又面晤ヲ請タル次第ナリ

申

兼知致セリ條約案ハ本大臣初テ拜見致シタルトニテ我朝廷ニ於テモ従前例規ナキ事柄ナレハ速ニ奏聞致シ度右寫方訓導ニ申付置タレトモ未タ謄寫セサル由成丈ケ至急ニ京城へ稟報致シ度存居候

大臣

訓導ヲ旅館へ遣サレタラハ該案ヲ講明シテ書記セシムヘキ旨昨日堅ク御約定致シ置タレハ貴大臣ニ於テハ必ス違約無之答ナルニ未タ其事ナシ甚タ不審ノ事ナリ一旦決約シタル事斯迄ニ艱路スルハ遺憾ニ堪ヘス且ツ

昨日濟物浦へ來航セシ汽船ハ本大臣東京出發ノ節残シ置キタル儀仗兵ノ一部ヲ載セ本大臣ノ使事督促ノ為我朝廷ヨリ差遣シタルナレハ事速ニ結局シテ兩國ノ好和ヲ永遠ニ繼續致度

申

右寫ハ本官ニ於テモ差急キ居リタレトモ出來セサル故京城へノ稟報今ニ遲延セリ猶嚴重ニ申付速ニ書取ラセ可申而ノ該案ノ寫ヲ京城へ差送ラハ必ス本書ヲ遣スヘキ旨申越スヘク夫ヲ就テモ寫方ハ差急キ可申ナリ

申儀ヨリ昔運慶錫ニ寫取ノ遲延ヲ詰責



スニ人未タ其命ヲ奉セズト答フ

大臣

條約案ハ譯官ニテ書取り直ニ京城ニ申報ノ  
手順ナル哉

尹申

譯官ヨリ本兩大臣へ差出シ夫ヨリ京城へ  
稟報スへキ筈ナリ

大臣

譯官ハ其命ヲ奉セサルモ職掌上ニ於テ寫取  
ルヘキ譯ナレ歟

尹申

草稿ヲ寫取ルハ譯官ノ職ナリ故ニ貴館ニ  
參上シ寫取ルヘキ旨ヲ命シタリ本大臣等

參館寫取ヘキ筈ハコレナシ

大臣

貴答粗語セリ固ヨリ貴大臣等自ラ寫取ラ  
ル

、ヤ否ヲ問ヒタルニハ非ス譯官ハ寫取ル  
キ旨ヲ命セラレストモ其職掌上ニ於テ旅館

ニ來リ寫取ルヘキ譯ナルヤトノ義ヲ御尋致  
セシナリ

尹申

御旅館へ參上寫取ルヘキ旨ハ本大臣ヨリ  
命シタリ然ルニ昨夜ハ御談判ノ件々ヲ京

城ニ稟報スヘキ為メ書類ノ取調等ニテ何  
分ニモ行届兼タル故今朝ハ早々參上致サ

スヘキ積ノ憂今ニ淹滞致シ居ルニ付速ニ



相運ハニ可申

大臣

昨日ハ貴朝廷ノ御決答ヲ七日内ニ兼リ度段  
申述タレトモ御懇請ノ次第ニ有之止ハ丁ラ  
得ス十日間ト御約定ニ及ヘリ然ルニ前ニ申  
述ル通我朝廷ヨリ催促之レ有ル上ハ若シモ  
遅延シテ此期限ヲ愆ラレナハ我國ノ内情ニ  
關シ或ハ好和ヲ保ツ能ハサルモ計リ難シ万  
一モ右等ノ事ニ立至リテハ我 天皇陛下  
ヨリ本大臣ニ命セラレタル旧交ヲ續キ益親  
睦ヲ敦フシ兩國人民ノ安寧ヲ保護セラレ、  
メノ 聖旨ヲ貫徹スル能ハサル丁アラシク恐  
レ日夜苦心ノ餘リ本日モ面接ノ上篤ト御談

判可致心得ニテ參上セシナリ

申

委細ニ兼諾セリ貴朝廷ヨリ又々汽船ヲ遣  
サレ貴國內情切迫ニ付和約ノ結局御督促  
アリタル趣ハ我朝廷ニ逐一奏聞可致

大臣

右ノ次第貴朝廷ハ御奏聞ノ上期日内ニ御決  
答ニナキ歟或ハ照會シタル條約案實際互換  
ノ義相行レサル時ハ兩國ノ好和必ス永續ヲ  
保タス依テハ貴大臣等ト平和ノ時ニ在テ面  
接ヲ得ル能ハサルヘシ是本大臣ノ苦心ニ堪  
ヘサル所ナリ

申



確ト羨リタリ奏聞ヲ經タル上ハ定テ我國  
情ヲ申述ル義モ可有之トイヘ共何レニモ  
京報ヲ得タル後篤ト御談判可仕條約案ハ  
取急キ寫方ヲ取計ラハヒムヘシ

大臣

既ニ本日マテ御談判致タル旨意ハ好和ヲ專  
トシ兩國ノ安全ヲ主トセリ猶又相共ニ一層  
注意シ神明ニ誓ヒ好和ヲ永續スヘキ様盡力  
致度万一モ御互ニ條約書ヘ鈐印致シ兼タル  
時ハ交際全ク斷絶シテ遂ニ兩國ノ安危ニ關  
スヘク此義ハ豫メ中置ヘシ之ヲ他日ニ驗セ  
ラレ度

儀伏共ノ因追々差送ルヘキニ取極リ居リタ

レトモ專テ好和ノ本旨ナルヲ以暫ク差正ノ  
置ケ然ルニ濟物浦ニ着シタル瀛船品川丸  
ヨリ其一部ヲ相送りタリ多人數上陸セシメ  
テハ地方官ノ煩勞ニ相成ルヘシト慮リ一切  
上陸ヲ差止メ置キタリ此義モ一應申入置ヘ  
シ  
我朝廷王政維新ノ始メ書ヲ貴國ニ送り其由  
ヲ告ケ貴國之ヲ存ケラレシヨリ以來ノ手續  
ハ昨日森山ヲ以テ細述致サセタル通ナレハ  
貴朝廷ヨリ相當ナル御挨拶相成リ本大臣歸  
奏ト上我朝廷ニ於テ満足セラレ、又ノ御蒙  
分有之度依テ該件ニ關シタル書類寫一綴差  
進シ置ヘシ



申

昨日ヨリ寫ト養リタレトモ猶又拜見可致

大臣

該件ニ就テハ貴朝廷ヨリ相當ナル御挨拶可  
相成哉否確ト養置度

申

京城へ申報ノ上ハ定テ貴朝廷ニ對シ相當  
ノ挨拶ニ可相成トハ存スレ共本大臣一分  
ヲ以テ確ト差極メ決答イタシカタシ

兩大臣

此御決答ハ格別手間取ルヘキ事柄ニ無之五  
六日間ニ養リ度

申

成丈ケ速ニ却答可致

右ニテ談畢リ午後三時帰館ス



條約案内議

二月十九日申摠訓導玄普運ヲシテ来タラシメ  
云フ京師ニ於テ條約條款中内議ノ件アル旨吳  
慶錫ヨリ申シ来レリ貴大臣ニ親接シ公然會商  
スルハ互ヒニ不便アリ故ニ請フ隨員ニ命シ我  
カ旅館ニ来ラレノヨ應ニ其底細ヲ陳スヘシ是  
ニ於テ大臣宮本小一野村靖ニ命シ申ノ旅館ニ  
抵ラシム其議スル所左ノ如シ

首款

大日本國朝鮮國云々

彼云大日本國朝鮮國對舉スル片ハ兩國  
對等ノ禮ニ於テ未タ安カラサルニ似タ  
スリ成ル可ク大ノ字ヲ省キタシ



大日本國皇帝陛下ハ云々朝鮮國王殿下ハ云々

彼云皇帝陛下ト稱シ國王殿下ト稱ス差等アルニ似タリ因テ日本國政府朝鮮國政府ト改メタシ

第二款

朝鮮國京城ニ到リ秉權大臣ニ親接シ云々彼云秉權大臣ハ其指ス所判然タラス禮曹判書ト改メタシ我レ答云フ我使臣交際事務ヲ商議スルハ秉權ノ大臣ニ非レハ不可ナリ禮曹判書ノ權幾許ナルヤ禮曹判書ハ只禮典ニ關係スルノミニテ交際事務ニ關係スルヤ否モ知ル可ラス

何官ニテモ談判ニ差支ナキ程ノ權ヲ有スル者ナレハ我ニ於テハ差支ナキナリ彼云以來ハ日本交際禮曹判書ニテ引受ヘシ故ニ其官名ヲ指定シタシ

第三款

日本ハ其國文ヲ用ヒ朝鮮ハ真文ヲ用ユヘシ  
彼云朝鮮人日本文ヲ讀得ルモノナシ若シ日本文ヲ單送セラルレハ即チ事務ノ差支ヲ生スヘシ願クハ漢文ヲ添ヘラレヨ

第四款

今ヨリ従前ノ慣例ヲ改革シ今般新立セル條款ヲ憑準下シ云々



從來宗氏歲遣船公貿易ノ事ハ朝鮮政府  
ノ欲セサル所ナルニ付キ從前ノ慣例ヲ  
改革ストハ歲遣船公貿易モ亦其中ニ在  
リヤ否彼ノ意未タ安ンセサルアリ故ニ  
慣例ノ下ニ歲遣船公貿易等ノ數語ヲ加  
ヘント欲ス

第五款

永興府海口云々

彼云永興府ニハ朝鮮國王開祖ノ廟アリ  
此地ニ於テ開港スレハ外國人ノ為メ如  
何ナル丁アルハキヤモ計リ難ケレハ此  
地ノ開港ヲ止メ他ノ港ヲ擇ビタシ

第九款

彼此ノ人民各自己ノ意見ニ任セ貿易セシ  
ムヘシ云々

彼云此條若シ朝鮮人民日本人民ニ對シ  
引負或ハ違約等アル時ハ朝鮮政府其責  
ニ任セサル能ハサルノ事ニ至ラン丁ヲ憂  
慮スト我答云各自己ノ意見ニ任セ貿易  
セシム兩國官吏毫モ之ニ關係スルナシ  
トアレハ政府固ヨリ其責ニ任スルノ理  
ナシ若シ政府此貿易ニ于預スル時ハ亦  
隨テ其責ニ任セサルヲ得スト然レモ彼  
意未タ安ンセス遂ニ款末ニ數言ヲ加ヘ  
來リ商ル其又意晦澁不明ナルニヨリ相  
議レテ尚シ兩國ノ商民欺罔街賣云々ノ



數語ヲ加ヘタリ

第十二款

日本國從前外國人民ニ准レテ通商スル各  
口ハ均シク朝鮮國人民ノ來往貿易スルヲ  
免許シ他國ト異ナルヲシ又朝鮮國ニテ爾  
後他國ト通好ヲ脩メ和約ヲ議立スルコト  
ル時此條約内載セサル所ニシテ別ニ他國  
ニ許セル箇條アラハ日本國ニテ同シク  
其特典ヲ蒙ラサルナシ

彼云此條朝鮮ハ西洋各國ト多クハ譬敵  
ナリ決シテ條約ヲ結フヲ為サス假令ヒ  
條約ヲ結フニ至ルモ必ス先ツ日本ト謀  
テリ穩テ日本ノ周旋ニ頼ラサルヲ得ス其

時ニ當リ若シ日本ニ許サハル所ノ條件  
ヲ各國ニ許スニ至ラハ日本政府ヨリ朝  
鮮政府ニ照會シテ可ナリ然ラハ事ニ於  
テ成ラサルナシ今預メ此條款ヲ設ケオ  
ク片ハ外國ト條約ヲ結フノ意アルニ似  
タリ請フ此款ヲ削除セン

官本等回報ス大臣乃チ各條皆彼ノ求ムル所ニ  
應レ斟酌改定ス其後大日本存シ朝鮮ノ上亦  
加ヘタリ



二月二十日午後七時三十分黒田辨理大臣  
井上副辨理大臣朝鮮國大臣申櫛尹滋兼ト  
執事廳ニ於テ談判浦瀬裕通譯森山茂野村  
靖安田定則小牧昌業鈴木大亮荒川徳滋陪  
坐相見ルノ儀畢テ

大臣

今夕來訪スルハ今日訓導ヨリ宮本へ引合タ  
ル條約案ノ儀ニ付面接ヲ請タル儀ナリ  
申

今日議政府ヨリ公文到來之ヲ貴大臣へ御  
覽ニ入ルヘキ旨申越セリ過刻訓導ニ命シ  
御旅館へ持セ遣シタルハ即チ是ナリ當所  
へ御由會前ニテ御一閱無之趣ニ付今貴覽



ニ呈ス

大臣

并見致スヘシ

此時議政府ヨリ申尹ニ大臣ヘノ委任状及  
我々大臣ヘノ照會文ヲ出ス一覽了テ

申

議政府照會案ハ此文面ニテ御異存無之ハ  
其趣京師ヘ申遣シ署印ノ上差上可申先ツ  
御内見ニ供シタルナリ

大臣

已ニ一覽ハ經タレ共猶持テ歸リ熟考ノ上後  
日何分ノ回答致スヘシ  
申

大臣

承知セリ

今日訓導ヨリ官本ヘ引合ノ趣ニテハ條約批  
准ノ儀御異存有之旨兼リタリ條約案ノ儀ニ  
付過日來御談判ノ次第ニ有之相改メシ箇條  
不少然ルニ批准ノ儀ハ條約ノ大眼目ニシテ  
必ス君主ノ署名鈐印ヲ要スルハ過日官本ヨ  
リモ申述タル通ナリ今國王ノ御名ヲ署サル  
、丁出来難シトナレハ條約ヲ結フノ詮無之  
最初御協議ニ及ヒシ條款中緊要ノ件モ曲テ  
貴意ニ應シ我々政府ニテ不滿意ノ儀トハ存  
シタレド初稿ヨリ許多減削セリ但批准署名  
相省クノ事ニ至テハ決シテ貴意ニ從ヒ難シ



乃チ我々皇帝陛下ノ御批ニ追テ差進スヘキ  
客ナレハ國王批准署名ナキノ條約書ハ受取  
リ復命イタシ難シ

申

兩國交際ノ道ハ誠信禮義ヲ以テ主トス批  
准ノ儀ハ先日吳慶錫玄普運ヲ貴館ヘ差出  
シ寫取ラセタルニ朝鮮國王御寶トノミ認  
メ有之其儘京師ニ稟報セリ尤モ右批准ハ  
臣下ニ對シタルノ文意ナレハ我々國ニ於テ  
ハ臣下ニ對シ玉名ヲ署スル儀無之右ハ夜  
前宮本氏ニモ濼々申述置タリ然ルニ臣下  
大ヨリ其君ニ對シ署名ヲ請フハ禮ニ於テ不  
可トス此事ハ本大臣死ストモ能ハス且ツ

先日示サレシ文案ニモ御名ヲ署スルノ事  
ナク既ニ朝廷ノ決議ヲ經タリ今更申立ル  
ハ如何ニモ不都合ナリ

大臣

我國ト清國トノ條約モ互ニ御批ノ國文ヲ交  
換ス各國皆然リ尤モ從前貴國國書ニモ國王  
ノ御名ヲ署セリ今批准署名ナケレハ條約相  
結ヒ候儀ニ至リカタシ

申

最前申上シ通此事ハ京師ヘ稟報ノ節御名  
ナキ者ニテ差出シタレハ今又署名ノ儀ヲ  
稟議スル片ハ大ニ人心ニ關係シテ容易ナ  
ラス且各國ノ例ヲ引キ諭サルニトイハ共



國各其法アリ我國ハ我國法ヲ守ルヲ以テ  
至當トセリ

大臣

原稿ニ朝鮮國王御寶トアリシハ署名押印ノ  
儀ナリ

申

我國ニ於テハ外國通信ニハ為政以德ノ御  
寶ヲ用ヒ朝鮮國王及御名ヲ刻シタル印章  
ナシ

副大臣

國王署名ハ如何ニモ不相叶之カ為メ條約成  
ラス交際破ルニ至ルモ已ムヲ得サルヤ

申

人臣ノ身トシテ國王署名ノ儀ヲ申請スル  
ハ何分相叶不申候シナカラ貴大臣等ニ接  
晤シ修好ノ議殆ント完成スルノ際ニ至リ  
批准一條ヲ以テ交誼ヲ傷ルハ誠ニ遺憾ノ  
次第ナレハ情實篤ト御諒察有之度

副大臣

勿論兩國ノ交誼ヲ傷ルヲ欲セサルカ故ニ反  
覆辯論ニ及ヒシナリ貴大臣等動モスレハ禮  
典ヲ主張イタサルレ共各國交際ニ於テハ自  
國ノ禮ヲ執テ之ヲ他國ニ行ヒ難キナリ兩  
國條約ヲ結フニ御批ナケレハ其國君ノ許可  
ヲ經タルヤ否ノ儀判然タル證憑ナシ御名ヲ  
署スルハ貴國ノ禮ニ礙アリモセヨ之カ為



ニ交誼ヲ傷リ民ヲ塗炭ニ苦ムルト孰レカ重  
キ執レカ輕キ

申

臣トシテ君ニ請フニ署名ヲ以テスルハ禮  
ニ於テ吾ノ能ハサル所ナリ何卒本官等為  
シ得ヘキ事ヲ御相談被下タレ批准ノ体裁  
議政府ノ奏本ニ國王ヨリ允ノ字ヲ署セラ  
レタル者ニテハ如何

副大臣

國王ノ署名ナク唯允ノ字ヲ記シタル而已ニ  
テハ證據トスヘキ者ナク兩國君主ノ結約タルヲ  
公認スルヲ得ス一体條約ハ必ス其君主ノ御批アルハ  
萬國普通ノ法ナルニ貴大臣等言ヲ左右ニ托シ之

ヲ拒ムハ交誼ヲ傷ルノ意アルニ非スヤ

尹申

我政府ニ於テ旧好ヲ重ニスルカ故ニ我輩  
ヲ派シ貴大臣等ニ接見シ修好ノ事ヲ議セ  
レメタリ豈ニ猜嫌ノ意アラシヤ唯批准ノ  
一事ハ臣下ニ對シ御名ヲ署スルハ猶父ノ  
其子ニ對シ己カ名ヲ親書スルカ如ク其理  
ナシ

大臣

貴國ノ禮ニ於テハ然ルヘシト雖モ條約批准  
其君主ノ署名アルハ普通ノ法ナリ本大臣等  
命ヲ奉シ國ヲ出ルヤ兩國永遠不易ノ條約ヲ  
議立スヘキヲ委任セラレシニ今御名一事ヲ



以テ和議諧ハサルニ至ルハ實ニ遺憾ニ堪  
ヘス我國年来貴國ト旧好ヲ續クノ盛意貴國  
之ヲ省セス今又專ラ自家ノ禮典ヲ主張セラ  
ルニヨリテ條約ナラサルニ至ラハ我國情  
紛紜兩國必ス平和ヲ保ツヲ得サルヘシ抑我  
國長崎ヨリ此地マテ貴國里法ニテ二千二三  
百里下ノ關ハ少シク之ニ過ク汽船ニテ此地  
ニ航スルニ昼夜ヲ踰ヘス今和好ノ議決定ス  
ル迄此兩港ヘ我カ兵隊屯集シ居レリ既ニ先  
日品川丸下ノ關ヲ發スル時本大臣等ハ貴國  
ニテ暴撃ニ遭ヒタル杯ノ風説アリ稍紛紜ヲ  
生セシ由尤モ兩國商議ノ條件互ニ相譲リ得  
ヘキ事ハ曲從ス可シト雖氏緊要ノ處ニ至テ

ハ相譲ル能ハス即テ御批一節是レナリ此事  
諧ハサレハ兩國講和ノ道モ絶ヘ必ス紛紜ヲ  
生セン其時ニ至テハ貴大臣等必ス思ヒ當ラ  
ルヘシ右ハ直ニ肺腑ヲ吐露シ陳述ス遺憾ナ  
レ氏貴大臣等ニ會晤スルモ今夕ヲ限リトス  
甲

我國ニ於テハ決シテ和好ヲ傷ルノ意コレ  
無ク乃チ釜山ヨリ先報ノ意ヲ兼テ本大臣  
爰ニ派出接見シ修好立約ノ件已ニ七八分  
ニ至レリ批准ニ國王ノ御寶ヲ押スルハ稟  
議ノ上ハ相運フヘシ御名ヲ署スルハ何分  
ニモ行ハレ難シ夫ニ就テハ然ルヘク更ニ便  
法ヲ示サレタシ



大臣

貴國禮典ノ儀ハ既ニ已ニ承知セリ然シナカ  
ラ事ニ變通ナカル可ラス即チ此茶碗ノ如キ  
茶ヲ斟ムノ器ナレトモ亦他ノ物ヲ盛ルニ換  
用スヘシ世ノ開化ニ隨テハ一概ニ拘泥ス可  
ラサル者アリ大小銃ノ如キ往昔ハ火繩ヲ用  
ヒ火ヲ發ス今貴國ノ用フル所ノ者は是ナリ其  
後燧ヲ用ヒ之ヲ鑽リテ火ヲ發スルニ變シ現  
今ハ雷管ヲ用ユ施條銃アリ元込アリ圓彈ヲ  
變シテ長彈トナス變スル毎ニ益精巧ナリ大  
砲ノ最精ナル者一軌ニ三發十丁ニ達スヘキ  
アリ此地ニ携ヘ来レリ日新ノ効已ニ是ノ如  
シ然ルニ批准一條貴國ノ禮典ニ拘泥シテ變

通セス遂ニ交誼ヲ傷ルニ至ルヘク誠ニ惜ム  
大 可シ本大臣ノ言フ所今日ハ御領解ナラサル  
モ他日必ス御領解アラシ  
申

器物ヲ以テ御比喻ノ趣了解セリ候ナカラ  
器物ハ左モアルヘシ君臣ノ情ハ之ニ異ナ  
リ變通ハ不相成ナリ但貴國ニ對シテハ過  
刻貴覽ニ供シタル議政府照會文ニモ情同  
兄弟ト有之如ク益旧好ヲ敦クセントノ意  
ナレトモ批准署名ノ義ハ是非御斷リ申度尤  
貴國ヲ除クノ外各國トハ何所迄モ修好結  
約ハ為サレタリ

大臣

貴國ヲ除クノ外各國トハ何所迄モ修好結  
約ハ為サレタリ



君臣ノ情義變通不相成ハ義知セリ然レ条約  
批准ハ臣下ニ對スルノ辭ト雖レ兩國交換ス  
ハキ者ナレハ友國ニ對シ交際ノ禮ニ關係ス  
右ハ昨夜宮本ヨリモ縷述セテ答更ニ便法ナ  
シ貴大臣等一概執拗御名ノ事ヲ肯ンセサレ  
ハ幾回辨論スルモ無益ナリ今夕ハ是ニテ辭  
去スヘシ

申

仰ノ通夜深ニ及ハ辭別イタスヘク御名  
一条ハ猶御熟考被下度其他ノ簡條ハ總テ  
異議コレナキナリ

大臣

誠ニ遺憾ノ次第ナリ御名ノ儀モ異議ナカル

一シト察シ不日双方鈐印ノ運ニ至リ諸事結  
局ノ上ハ過刻申述ヘシ當地ニ勢来ル所ノ大  
砲一座國王殿下ニ獻シ貴大臣等ニハ短銃ヲ  
贈呈セント專ラ修好順成ノ日ヲ待テ居シニ  
豈料ランヤ勿々起程ノ事ニ立至レリ貴大臣  
等他日悔フルヲ無キヲ要ス下然先ツ今晚ハ  
當地ニ滞留スヘシ  
右ニテ談畢ル十二時帰館



Vertical columns of faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

議政府照會底稿一馬

兩國修睦行且三百年矣情若兄弟遵守旧制各

安人民無相爭嚇交聘之儀不越其限慰賀之訊

互恤其弊有往必復有贈必酬馬馮接信以達事

情萊館開市毋踰疆界論其隣好之永保即不出

禮義誠信四字耳豈意近年以書契事兩相疑阻

也其疑阻之端寔有曲折兩國書契本自謹嚴雖

一字不中規式則斷々執辨此為兩國旧例然也

東萊守臣及任譯之不敢遽受亦照此例而然也

曾在丁卯春間

中國禮部咨文專來據總理各國事務衙門奏天津

上海通商大臣送呈新聞紙內云有



日本客人名八戶順叔送來新聞原稿云迎來

日本國現有火輪軍艦八十餘艘有討

朝鮮之志又云

朝鮮國王每五年必至江戶拜謁

大君獻貢是即古例也

朝鮮王廢例久故發兵責其罪又云現有興師往討

朝鮮之志因

朝鮮五年一朝貢至今負固不服此例久廢故也大

抵八戶順叔既是

貴國之人則宜解

貴國之事而做出虛罔之言加以齷辱之辭拜謁朝

貢誣之於文隣相敬之邦可乎興師往討施之於

修好無釁之地可乎詩張如此等語流布海內海

外是誠何意也弊邦臣民安得無訝怪乎又安得

無憤慨乎戊辰至庚午書契之不敢遽受者不惟

規式之有礙諒由誣說之致疑然弊國之所守者

即禮義誠信故傳令搜逼之萊守竄以邊遠壅蔽

欺罔之訓導施以梟獍而

貴國外務省新書契修來之後聞以禮服正門許久

相持故自弊國政府閱飭於萊守不拘瑣細儀節

俾即受納于

朝廷矣適值外務省官之還入未及公幹旋聞

貴大臣辨理之行臨境矣今聞

貴大臣與我

國使相問答則以弊國擯斥

貴國使臣為辭而書契遲滯之由悉陳如右豈或有



擯斥使臣之意哉兩國之互相疑阻以至於此慙  
愧痛歎有不可勝言

朝廷之議論紛紛則罷戰相繼軍民之欲為加兵則  
遣使鎮撫

貴國厚意何可忘也萬々感謝但弊國則既窺某守  
又誅訓導務盡在我之道矣未審

貴國將八戶順叔虛罔峻辱之事如何以處之耶

貴大臣與弊國使相接見辭氣之忠厚辨理之坦  
白兩國猜疑一朝開叙有以見

大人君子秉心和平為國勤蓋竊不勝欽仰若其  
書契禮物重尋和輯只當遵依三百年旧規而大  
事則

貴國政府與弊國政府小幹則

貴國外務省與弊國禮曹比等往復永以為好或有  
約條之新定者則其在痛癢相關之地必究兩相  
便宜倘有彼利而此害此通而彼窒則事理之在  
所當念惟願推以仁慈爛加 高畧焉

朝鮮國議政府照會

日本國辦理大臣

光緒二年正月 日



貴國大臣申櫛ト其旅館ニ於テ談判浦瀨  
裕通譯宮本小一野村靖同座  
森山

二月二十一日午前十一時森山茂鈴木大亮  
朝鮮國大臣申櫛ト其旅館ニ於テ談判浦瀨  
裕通譯宮本小一野村靖同座

森山

昨夜執事廳ニ於テ御應接ノ際貴國王殿下ノ  
批准御名ノ義ニツキ貴大臣云フ我大臣演述  
ノ旨趣前後相違セリト然ルニ該件ハ我大臣  
ニ於テ相違シタル慮絶テ無之ニヨリ最前兩  
訓導吳慶錫我旅館ニ來テ條約案ヲ寫取リ夕  
ル手續等篤ト申述ニ艱難ヲ生シタル理由ヲ  
詳明ニ致スヘキ旨我兩大臣ノ命ヲ受ケ参館  
セリ

申



我國王殿下ノ御名ヲ署スルノ一案ハ、繼令  
最初ヨリ御談判ニ相成タルニモセヨ國法  
上ニ於テ必ス施シ得ル事柄ニ無之況ヤ  
條約案ノ寫既ニ我朝廷ニ奏聞シタル上ハ  
御寶ノミニテ相濟候様致度

森山

兩訓導ノ寫取タル條約案一應拜見致度候

申大臣玄普運ニ命シ該案寫ヲ出サシム  
乃チ我ノ原稿ニ照合シ玉御寶三字ヲ金  
抹シタルヲ見出タリ

鈴木

本月十二日執事廳應接ノ時我大臣此草案本日  
國ヲ以テ修好結約ノ條款ヲ演述シ了リ後刻

訓導ヲ我公館ニ遣リ寫取ラセントノ旨貴大  
臣明言セラレタルニ翌十三日午後一時ニテ  
該負就館セス同日ノ談判ニ於テ我大臣ヨリ  
之ヲ貴大臣ニ促シ午後四時慶錫普運乃チ來  
ル森山及予之ニ接シ原稿ニ就キ逐款講明シ  
普運筆ヲ執リ之ヲ漢文ニ譯セリ御批案ノ尾  
ニ朝鮮國王李基ノ下ニ方形ヲ画シ鈐印ノ位  
置ヲ示シタルヲ見兩人ヨリ臣子ノ分國王ノ  
姓名ヲ真寫スル能ハス朝鮮國王御寶ト譯シ  
タキ旨ヲ申述タリ依テ意譯ヲ用ルハ敢テ禁  
スヘキニ非ス然レトモ兩國互換スヘキ本書  
ハ現ニ御名ヲ署セラレ一キ旨ヲ答ヘ且此譯  
文ハ我國文ト適合セサル字面影多アリ故ニ



今唯其主意ヲ認タルノミナレハ行文ハ他日  
ノ協議ニ付スヘキ旨ヲ確ニ兩人ニ申聞置タ  
リ然ルニ王御寶ノ三字ヲ塗抹シ別ニ擡頭シ  
テ之ヲ改書シ單ニ御寶ヲ鈐スルノミニテ朝  
鮮國王御名ヲ記スルノ意ニ非スト言フハ甚  
タ不審ナリ加ルニ昨二十日宮本大丞小牧幹  
事及余三人昔運ト會シ該案文字ノ適否ヲ協  
議添削ノ上御名ノ二字ヲ補入シタリ是固ヨ  
リ意譯ヲ改メ直書シタルノミナレハ更ニ紛  
議ヲ生スヘキノ理ナシ今幸ニ昔運モ座ニ在  
リ篤ト御調査ノ上間違タル原由ヲ詳明致度  
候  
申

我國王御名ヲ記スルハ國法ニ於テ何分ニ  
モ施シ置シ單ニ御寶ノミニテ相濟シ候様  
幾重ニモ御周旋ニ預リ度候

森山

御名之ヲクテハ條約交換不相調旨既ニ我大  
臣ヨリ申述ラレタル通ナレハ我等ヨリ周旋  
ノ義ハ御断致候唯今鈴木ヨリ演述シタル手  
續ニ據レハ我大臣ニ於テ前後相違ノ廉毫モ  
無之然ルニ昨夜ノ御辭ハ何等ノ御考ニ候哉  
申

誰ノ間違ニモセヨ今更取糺スニモ及ノ間  
敷唯御寶ノミニテ結約ノ義ヲ企望候

鈴木



該案寫取ノ手續既ニ續陳ノ通ナリ我方ニ於  
テハ毫モ間違ノ慮無之ハ勿論殊ニ三字ヲ塗  
抹シタル證據モ判然タレハ全ク貴方ニ生シ  
タル齟齬ト相認ノ候

森山

我大臣ノ談判前後相違シタリト申サレタル  
主意兼リ度候

申

既ニ御實ノミト我朝廷ニ奏聞シ置タル故  
再ヒ御名ノ事ヲ申遣サハ在京ノ諸大臣等  
前後齟齬セリト疑念スヘクトノ意ヲ陳一  
タル事ニテ全ク貴國大臣ニ於テ相違セラ  
レタリトノ譯ニハ無之候間貴大臣ハ可然

御申立相成度候

森山

兼知致シ候我大臣ニ對シ相違シタリトノ義  
ヲ申サレタルト無之段貴大臣ノ御答詞儘ニ  
稟報可致候

右談畢テ森山鈴木掃部宮本野村留ツテ別  
ニ議スル所アリ



Blank page with vertical lines.

二月二十二日黒田大臣井上副大臣將ニ本  
艦ニ帰ラントシ理装既ニ了ル午前十一時  
三十分接見大官申儀副官尹滋養我公館ニ  
就キ談判浦瀬裕通話官本小一野村靖鈴木  
大亮陪坐

申

本日帰駕ヲ命セラレタル者貴隨員安田ヲ  
以テ報セラレ驚愕為サレ所ヲ知ラス只管  
歸程ヲ緩フセラレシトシ為ニ参館イ  
タセリ

大臣

殊ニ高趾ヲ勞セラレ感荷ニ堪ハス然ルニ前  
日来會商ヲ經タル件中追々艱難ヲ生シタル



事アリ熟之ヲ察スルニ遂ニ修好ノ目的ヲ達  
スル能ハサル可シ故ニ速ニ帰艦ニ決意シタ  
リ本大臣自ラ貴寓ニ抵リ別ヲ告クヘキ苦ナ  
レトモ潮候ノ都合アリ時限已ニ迫レリ請フ  
此ヨリ辭別セシ

申

日来會商ノ件殆ント順便ニ就ク令ニレテ  
歸ラルハ本大臣等實ニ遺憾ニ耐ヘス令  
ヨリ五日間ノ猶豫ヲ賜ラハ實ニ無限ノ大  
幸ナリ

大臣

修好ハ彼我人民ノ安危ニ関スル兩國政府ノ  
重大事件ナリ速ニ順成ノ功ヲ奏セサル可ラ

サレハ項日以来幾回モ辨論セリ然レトモ令  
ニ仍ホ其結果ヲ得ルノ目的ナシ故ニ本日歸  
艦ノ事ニ決シタリ

申

昨夜吳慶錫京城ヨリ歸レリ其報ニ依レハ  
令般ノ事廟議皆順成ニ就ケリト想フニ條  
約案ヲ清書スル迄ナリ猶又直ニ同人ヲ上  
京セシメ廷議ヲ促カスヘシ故ニ四五日間  
ノ猶豫ハ是非トモ許諾セラレタシ

大臣

此次會商スル所ノ事順成ニ至ラサレハ兩國  
ノ旧好三百年ノ久アルモ一朝之ヲ塗泥ニ委  
スルノミナラス継クニ干戈ヲ以テスルナキ



ヲ保スル能ハス是本大臣ノ深ク憂フル所ナ  
リ貴國和好ノ議アル果シテ貴大臣ハ言ノ如  
クナラハ順成ノ功期ヲ刻シテ俟ツヘシ然レ  
ハ姑ラク解纜ヲ駐メ明日ヨリ四日間船中ニ  
在テ決答ヲ俟タシ委細ハ副大臣ヨリ申述フ  
ヘシ本大臣出發前ニ辨スヘキ急務アリ請フ  
此ヨリ辭別セシ

黒田大臣乃チ辭シテ出ツ

副大臣

既ニ黒田大臣ノ言ノ如ク此回ノ議ハ容易ニ  
協成シ難カルヘシ何ントナレハ貴國政府ヨ  
リ交付セラルヘキ謝辭ノ草案ヲ見ルニ語氣  
辨解ニ涉リ謝辭ノ實ナシ加フルニ過日既ニ

我意ヲ領セラレタル雲揚艦ノ件ニ至テハ案  
中一言此ニ及フナシ且前日来我隨員中へ協  
議セラレシ件々兎角齟齬ノ事多ク殊ニ吳慶  
錫玄普運ニ訓導ノ寫取シタル條約案其結尾  
ニ朝鮮國王御名印トアルヲ濫リニ朝鮮國王  
御寶ト寫シ替フ此事ハ昨日已ニ森山鈴木ヲ  
シテ辨セシメタリ貴大臣又御批交換ノ事六  
ケ月ノ後ト約セシナト申サレシ由皆齟齬ノ  
甚シキ者ト謂フヘシ故ニ寧ロ荏苒日ノ度ラ  
シヨリハ解決書ヲ送り速ニ發艦セントシ案  
既ニ成レリ今貴大臣ノ懇請ニ仍リ明日ヨリ  
四日間ノ猶豫ヲ約スト雖モ若シ期ヲ愆クレ  
ハ直ニ技錯スヘシ尤モ隨員ニ三名ヲ此ニ駐



留セシメ以テ報知ニ便ニ不委情ハ就テ商議  
セラルヘシ本大臣等既ニ數回ノ談判ニ於テ  
盡ク心情ヲ吐露セリ今日ニ及テハ別ニ議ス  
ヘキノ件ナレ若シ條約順成ニ至ルノ運ニ會  
セハ再ヒ來リテ協辦セントス  
申

貴隨官宮本野村ヨリ商議セラレシ件々奏  
聞ノ為ノニ訓導ヲ至急ニ上京致サスベシ  
仍テハ不日ニ貴意ヲ安スルヲ得ヘシ貴大  
臣今日ノ發軔ハ強テ止ムルヲ得スト雖モ  
四日間ニハ必ス順成ヲ期ス可シ其時間ハ  
必ス貴艦ニ在テ待タレントテ懇請ス  
副大臣

然ラハ此ヨリ辭別セン兩國ノ和平ヲ破リ彼  
我ノ人民不測ノ残害ニ罹ル等ノ事萬一モ之  
ナキヲ希望ス猶詳細ノ事ハ宮本等ノ注意モ  
アルヘシ篤ト熟議セラルヘシ  
申

事全ク順成シ貴兩大臣再ヒ上陸アルノ期  
ヲ待ツテ面晤ヲ得ヘシ  
右畢テ申尹歸ル即時黒田大臣儀仗兵ヲ率ヒ  
公館ヲ發ス井上副大臣ハ潛カニ館中ニ留ル



*[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side of the page]*

申尹ヨリ宮本小一野村靖ニ付スル憑單

條約與御批同時交付事即送任官稟議周旋

大朝鮮國君王 批准規式

批准中解意無異字句當潤色

政府照會文字亦當從其文簡意約以五日交付

條約各款中可以添入者關於細目議定時更議事

右諸條定議日字期於以五日為定

丙子正月二十八日

接見大官 申 摺

副大官 尹滋兼



御批朝鮮國主上トアルハ前日ノ約ニ反  
ス是河教ナルヤ既ニ條約互換ノ際ニ臨ニ斯  
艱難ヲ致スハ誠ニ解シ難シ  
申  
貴諭ノ如ク前日ハ朝鮮國君王ト書スヘキ

大臣

二月廿五日申樞宮本小一野村靖ニ報シテ  
曰ク吳慶錫玄普運京師ヨリ帰ル條約美謝  
辭共ニ貴大臣ノ商ル所ニ從ヒ異議アルナ  
シ當ニ廿七日ニ於テ交換スヘシト乃チ之  
ヲ大臣ニ報ス時ニ副大臣猶  
留テ府ニ在リ廿六日大臣頂  
山島ヲ發シ再々府ニ入ル廿七日鍊武堂ニ  
於テ兩大臣申尹ト會同條約鈐印アリ

貴諭ノ如ク前日ハ朝鮮國君王ト書スヘキ



ヲ約セシ所京城ヨリ斯ノ如ク書載シ来リ  
令更如何トモスル能ハス成程前約ニハ反  
スレバ我國王臣下ニ對シテハ君王或ハ主  
上ト称スル故主上ト書キタル譯ナレハ是  
ニテ御領受相成ルニ於テハ本大臣共別テ  
幸甚ナリ

大臣

前ニ陳スル如ク既ニ条約互換ノ際ニ臨ミ曾  
テ一應ノ御照會モナク前約ニ反スルハ實ニ  
遺憾ニ堪ヘス候ナカラ君王ヲ王上ニ改メラ  
レタルノミニテ事ニ害アルトモ思ハレサレ  
ハ先ツ此御批ヲ領受スヘシト雖也我朝廷ニ  
於テハ如何思ハル可キヤ計リ難シ此儀ハ念

ノ為メ申置ナリ

申

貴諭ノ趣委細義知セリ

互換ノ儀畢リ彼酒菓ヲ供シ音樂ヲ奏ス我祝  
詞ヲ述ヘ畢リ別ヲ告ケテ本艦ニ帰ル

條約互換二月廿七日ニ在リ而シテ條約書  
廿六日ヲ署スル者ハ彼ト訂スル所ノ定議  
日期廿六日ヲ限トス故ニ吳慶錫等京師ヨ  
リ帰ル其齋シ至ル所ノ淨水二月初二日我  
六月廿ヲ署シ更改ニ便ナラス然レ我大臣報  
ヲ得テ本艦ヨリ来ル日時太々迫ル是ヲ以  
テ廿七日ニ於テ會同互換セシナリ讀者ノ  
疑ヲ来スヲ恐レ此ニ附記ス



修好條規

大日本國

大朝鮮國ト素ヨリ友誼ニ敦ク年所ヲ歴有セリ  
今兩國ノ情意未タ洽ホカラサルヲ視ルニ因テ  
重テ舊好ヲ修メ親睦ヲ固フセント欲ス是ヲ以  
テ日本國政府ハ特命全權辦理大臣陸軍中將兼  
參議閣長官黒田清隆特命副全權辦理大臣議  
官井上馨ヲ簡シ朝鮮國江華府ニ詣リ朝鮮國政  
府ハ判中樞府事申穩都摠府副摠管尹滋養ヲ簡  
シ各奉スル所ノ事ニ依リテ修好條規ニ  
諭旨ニ遵ヒ議立セル條款ヲ左ニ開列ス

第一款

朝鮮國ハ自主ノ邦ニシテ日本國ト平等ノ權ヲ



保有セリ嗣後兩國和親ノ實ヲ表セント欲スル  
ニハ彼此互ニ同等ノ禮義ヲ以テ相接待シ毫モ  
侵越猜嫌スル事アルヘカラス先ツ従前交情阻  
塞ノ患ヲ為セシ諸例規ヲ悉ク革除シ務メテ寬  
裕弘通ノ法ヲ開擴シ以テ雙方トモ安寧ヲ永遠  
ニ期スヘシ

### 第二款

日本國政府ハ今ヨリ十五ヶ月ノ後時ニ隨テ使  
臣ヲ派出シ朝鮮國京城ニ到リ礼曹判書ニ親接  
シ交際ノ事務ヲ商議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ  
留滞シ或ハ直ニ歸國スルモ共ニ其時宜ニ任ス  
ヘシ朝鮮國政府ハ何時ニテモ使臣ヲ派出シ日  
本國東京ニ至リ外務卿ニ親接シ交際事務ヲ商

議スルヲ得ヘシ該使臣或ハ留滞シ或ハ直ニ歸  
國スルモ亦其時宜ニ任スヘシ

### 第三款

嗣後兩國相往復スル公用文ハ日本ハ其國文ヲ  
用ヒ今ヨリ十年間ハ添ユルニ譯漢文ヲ以テシ  
朝鮮ハ真文ヲ用ユヘシ

### 第四款

朝鮮國釜山ノ草梁項ニハ日本公館アリテ年來  
兩國人民通商ノ地タリ今ヨリ従前ノ慣例及歲  
遣船等ノ事ヲ改革シ今般新立セル條款ヲ憑準  
トナシ貿易事務ヲ措辦スヘシ且又朝鮮國政府  
ハ第五款ニ載スル所ノ二口ヲ開キ日本人民ノ  
往來通商スルヲ准聽スヘシ右ノ場所ニ就キ地



面ヲ賃借シ家屋ヲ造營シ又ハ所在朝鮮人民ハ  
屋宅ヲ賃借スルモ各其隨意ニ任スヘシ

第五款

京圻忠清全羅慶尙咸鏡五道ハ沿海ニテ通商ニ  
便利ナル港口ニ個所ヲ見立タル後地名ヲ指定  
シ開港ノ期ハ日本曆明治九年二月ヨリ朝鮮曆  
丙子年正月ヨリ共ニ數ヘテ二十個月ニ當ルヲ  
期スヘシ

第六款

嗣後日本國船隻朝鮮國沿海ニ在リテ或ハ大風  
ニ遭ヒ又ハ薪糧ニ窮竭シ指定シタル港口ニ達  
スル能ハサル時ハ何レハ港灣ニテモ船隻ヲ寄  
泊シ風波ノ險ヲ避ケ要用品ヲ買入レ船具ヲ修

繕シ柴炭類ヲ買求ムルヲ得ヘシ勿論其供給費  
用ハ總テ船主ヨリ賠償スヘシト雖モ是等ノ事  
ニ就テハ地方官人民トモニ其困難ヲ體察シ真  
實ニ憐恤ヲ加ヘ救援至ラサル無ク補給取テ吝  
惜スル無ルヘシ倘又兩國ノ船隻大洋中ニテ破  
壞シ乗組人負何レハ地方ニテモ漂着スル時ハ  
其地ノ人民ヨリ即刻救助ノ手續ヲ施シ各人ノ  
性命ヲ保全セシメ地方官ニ届出該官ヨリ各本  
國へ護送スルカ又ハ其近傍ニ在留セル本國ノ  
官負ヘ引渡スヘシ

第七款

朝鮮國ノ沿海島嶼岩礁從前審檢ヲ經サレハ極  
メテ危險トナスニ因リ日本國航海者自由ニ海



岸ヲ測量スルヲ准シ其位置淺深ヲ審ニシ圖誌  
ヲ編製シ兩國船客ヲシテ危險ヲ避ケ安穩ニ航  
通スルヲ得セシムヘシ

第八款

嗣後日本國政府ヨリ朝鮮國指定各口ハ時宜ニ  
隨テ日本商民ヲ管理スルノ官ヲ設ケ置クヘシ  
若シ兩國ニ交渉スル事件アル時ハ該官ヨリ其  
所ノ地方長官ニ會商シテ辨理セン

第九款

兩國既ニ通好ヲ經タリ彼此ノ人民各自己ノ意  
見ニ任セ貿易セシムヘシ兩國官吏毫毛之レ  
關係スルヲナシ又貿易ノ限制ヲ立テ或ハ禁沮  
スルヲ得ス倘シ兩國ノ商民欺罔街賣又ハ貸借

償ハサルヲアル時ハ兩國ノ官吏嚴重ニ該通商  
民ヲ取糾シ償欠ヲ追辨セシムヘシ但シ兩國ノ  
政府ハ之ヲ代償スル理ナシ

第十款

日本國人民朝鮮國指定ノ各口ニ在留中若シ罪  
科ヲ犯シ朝鮮國人民ニ交渉スル事件ハ總テ日  
本國官負ノ審斷ニ歸スヘシ若シ朝鮮國人民罪  
科ヲ犯シ日本國人民ニ交渉スル事件ハ均シク朝鮮國官  
負ノ查辨ニ歸スヘシ尤モ雙方トモ各其國律ニ拠テ裁判シ毫  
モ回護袒庇スルヲナク務メテ公平允當ノ裁判ヲ示スヘシ

第十一款

兩國既ニ通好ヲ經タレハ另ニ通商章程ヲ設立  
シ兩國商民ノ便利ヲ與フヘシ且現今議立セル



各款中更ニ細目ヲ補添シテ以テ遵照ニ便ニス  
ヘキ條件共自今六ヶ月ヲ過スレテ兩國另ニ委  
員ヲ命シ朝鮮國京城又ハ江華府ニ會シテ商議  
定立セシ

第十二款

右議定セル十一款ノ條約此日ヨリ兩國信守遵  
行ノ始トス兩國政府復之ヲ變革スルヲ得ス以  
テ永遠ニ及ホシ兩國ノ和親ヲ固クスヘシ之レ  
カ為ニ此約書二本ヲ作り兩國委任ノ大臣各鈐  
印シ相互ニ交付シ以テ憑信ヲ昭ニスルモノナ  
リ

大日本國紀元二千五百三十六年明治九年三月  
二十六日

大日本國特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黒田清隆印  
大日本國特命副全權辦理大臣議官井上馨印

大朝鮮國開國四百八十五年丙子二月初二日

大朝鮮國大官判中樞府事申摠印  
大朝鮮國副官都摠府副摠管尹滋養印



大日本國與  
大朝鮮國素敦友誼歷有年所今因視兩國情意未洽欲重修舊好以固親睦是以日本國政府簡特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆特命副全權辦理大臣議官井上馨詣朝鮮國江華府朝鮮國政府簡判中樞府事申摠都摠府副摠管尹滋養各遵所奉諭旨議立條款開列于左

第一款  
朝鮮國自主之邦保有與日本國平等之權嗣後兩國欲表和親之實須以彼此同等之禮相待莫或侵越稍強宜先將從前為交情阻塞之患諸例規一切

大日本國與  
大朝鮮國素敦友誼歷有年所今因視兩國情意未洽欲重修舊好以固親睦是以日本國政府簡特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆特命副全權辦理大臣議官井上馨詣朝鮮國江華府朝鮮國政府簡判中樞府事申摠都摠府副摠管尹滋養各遵所奉諭旨議立條款開列于左



革除務開擴寬裕弘通之法以期永遠相安

第二款

日本國政府自今十五個月後隨時派使臣到朝鮮國京城得親接禮曹判書商議交際事務該使臣駐留久暫共任時宜朝鮮國政府亦隨時派使臣到日本國東京得親接外務卿商議交際事務該使臣駐留久暫亦任時宜

第三款

嗣後兩國往來公文日本用其國文自今十年間另具譯漢文一本朝鮮用真文

第四款

朝鮮國釜山草梁項立有日本公館久已為兩國人民通商之區今應革除從前慣例及歲遣船等事憑

準新立條款措辦貿易事務且朝鮮國政府須另開第五款所載之二口准聽日本國人民往來通商就該地賃借地基造營家屋或僑寓所在人民屋宅各隨其便

第五款

京圻忠清全羅慶尙咸鏡五道中沿海狹便通商之港口二處指定地名開口之期日本曆自明治九年二月朝鮮曆自丙子年正月起算以二十個月為限

第六款

嗣後日本國船隻在朝鮮國沿海或遭大風或薪糧窮竭不能達指定港口即得入隨處沿岸支港避險補缺修繕船具買求柴炭等其在地方供給費用必由船主賠償凡是等事地方官民須特別加意憐恤



救援無不至補給勿敢吝惜倘兩國船隻在洋破壞  
舟人漂至隨處地方人民即時救恤保全稟地方官  
該官護還其本國或交付其就近駐留本國官員

第七款

朝鮮國沿海島嶼岩礁從前無經審檢極為危險准  
聽日本國航海者隨時測量海岸審其位置深淺編  
製圖志俾兩國船客以得避危就安

第八款

嗣後日本國政府於朝鮮國指定各口隨時設置管  
理日本國商民之官遇有兩國交涉案件會商所在  
地方長官辦理

第九款

兩國既經通好彼此人民各自任意貿易兩國官吏

毫無干預又不得限制禁阻倘有兩國商民欺罔街  
賣借貸不償等事兩國官吏嚴拏該通商民令追辦  
償欠但兩國政府不能代償

第十款

日本國人民在朝鮮國指定各口如其犯罪交涉朝  
鮮國人民皆歸日本官審斷如朝鮮國人民犯罪交  
涉日本國人民均歸朝鮮官查辦各據其國律訊斷  
毫無回護祖庇務昭公平允當

第十一款

兩國既經通好須另設立通商章程以便兩國商民  
且俟現下議立各條款中更應補添細目以便遵照  
條件自今不出六個月兩國另派委員會朝鮮國京  
城或江華府商議定立



第十二款

右十一款議定條約以此日為兩國信守遵行之始  
兩國政府不得復變革之永遠信遵以敦和好矣為  
此作約書二本兩國委任大臣各鈐印互相交付以  
昭憑信

大日本國紀元二千五百三十六年明治九年二月  
廿六日

特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆

特命副全權辦理大臣議官井上馨

修好條規

大日本國與全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆  
洽欲重修舊好以固親睦是以日本國政府簡特命  
全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清  
隆特命副全權辦理大臣議官井上馨詣朝鮮國江  
華府朝鮮國政府簡判中樞府事申樞副總管尹滋  
萊各遵所奉諭旨議立條款開列于左

第一款

朝鮮國自主之邦保有與日本國平等之權嗣後兩  
國欲表和親之實須以彼此同等之禮相待不可毫  
有侵越猜嫌宜先將從前為交情阻塞之患諸例規  
一切革除務開擴寬裕弘通之法以期永遠相安



第二款

日本國政府自今十五個月後隨時派使臣到朝鮮國京城得親接禮曹判書商議交際事務該使臣駐留久暫共任時宜朝鮮國政府亦隨時派使臣到日本國東京得親接外務卿商議交際事務該使臣駐留久暫亦任時宜

第三款

嗣後兩國往來公文日本用其國文自今十年間別具譯漢文一本朝鮮用真文

第四款

朝鮮國釜山草梁項立有日本公館久已為兩國人民通商之區今應革除從前慣例及歲遣船等事憑準新立條款措辦貿易事務且朝鮮國政府須別開

第五款所載之二口准聽日本國人民往來通商就該地賃借地基造營家屋或僑寓所在人民屋宅各隨其便

第五款

京珩忠清全羅慶尚咸鏡五道中沿海擇便通商之港口二處指定地名開口之期日本曆自明治九年二月朝鮮曆自丙子年二月起算共為二十個月

第六款

嗣後日本國船隻在朝鮮國沿海或遭大風或薪糧窮竭不能達指定港口即得入隨處沿岸支港避險補缺修繕船具買求柴炭等其在地方供給費用必由船主賠償凡是等事地方官民須特別如意憐恤救援無不至補給勿敢吝惜倘兩國船隻在洋破壞舟



人滯至隨處地方人民即時救恤保全稟地方官該官護送其本國或交付其就近駐留本國官員

第七款

朝鮮國沿海島嶼巖礁從前無經審檢極為危險准聽日本國航海者隨時測量海岸審其位置深淺編製圖志俾兩國船客以得避危就安

第八款

嗣後日本國政府於朝鮮國指定各口隨時設置管理日本國商民之官遇有兩國交涉案件會商所在地方長官辦理

第九款

兩國既經通好彼此人民各自任意貿易兩國官吏毫無干預又不得限制禁阻倘有兩國商民欺罔術

賣貸借不償等事兩國官吏嚴拏該逋商民令追辦債欠但兩國政府不能代償

第十款

日本國人民在朝鮮國指定各口如其犯罪交涉朝鮮國人民皆歸日本官審斷如朝鮮國人民犯罪交涉日本國人民均歸朝鮮官查辦各據其國律訊斷毫無回護祖庇務昭公平允當

第十一款

兩國既經通好須另設立通商章程以便兩國商民且併現下議立各條款中更應補添細目以便遵照條件自今不出六個月兩國另派委員會朝鮮京城或江華府商議定立

第十二款



右十一款議定條約以此日為兩國信守遵行之始  
兩國政府不得復更革之永遠信遵以敦和好矣為  
此作約書二本兩國委任大臣各鈐印互相交付以  
昭憑信

大朝鮮國開國四百八十五年丙子二月初二日

大官判中樞府事申 摠印

副官都摠府副摠管尹滋養印

大日本國紀元二千五百三十六年明治九年二月  
二十六日

特命全權辦理大臣陸軍中將兼參議開拓長官黑田清隆印

特命副全權辦理大臣議官井上馨印

丙子二月初一日判中樞府事申摠都摠府副摠管  
尹滋養奏將於

本年二月初二日大日本國特命全權辦理大臣黑  
田清隆特命副全權辦理大臣井上馨與臣摠臣滋  
養會同江華府互換條約一摺逐款允當已予批准  
行諸久遠益敦親睦其餘條約內應行各事允爾官民  
悉奉此意一體按照辦理



大朝鮮國主上











... 貴國在亞細亞洲東洋中疆土鄰近海岸  
相對使幣往來茲三百祀但因中間有齟齬以致情  
意之不洽今本大臣等奉使 貴國會同于 貴大  
臣等重修旧交議立新約昭兩國共守之信成萬代  
不易之典寔為國家無疆之福矣本大臣等亦與有  
榮焉謹祝 貴國君王及諸有司之康寧併謝 貴  
大臣等誠心協和令本大臣等全我使命之厚誼云

同譯漢文

我國與 貴國在亞細亞洲東洋中疆土鄰近海岸  
相對使幣往來茲三百祀但因中間有齟齬以致情  
意之不洽今本大臣等奉使 貴國會同于 貴大  
臣等重修旧交議立新約昭兩國共守之信成萬代  
不易之典寔為國家無疆之福矣本大臣等亦與有  
榮焉謹祝 貴國君王及諸有司之康寧併謝 貴  
大臣等誠心協和令本大臣等全我使命之厚誼云

明治九年二月廿七日







付テハ貴國ニ於テモ速ニ答禮ノ使節ヲ我國  
ヘ差立ラレタシ元來兩國ニテ對等ノ禮ヲ行  
フ上ハ萬事務ヲテ其平ヲ得ル様ニスベキハ  
勿論ナリ兼テ説ク所ノ如ク我國ニ於テハ偏  
ニ三百年ノ舊交ヲ重シ候ヨリ御義知ノ通り  
現ニ貴重ノ大臣ヲ派出シ數隻ノ軍艦ヲ以テ  
千里ノ波濤ヲ航シ從來ノ紛紜ヲ排除シ更ニ  
和好ヲ結ヒタルハ右ノ出費ノミヲ算シテモ  
真ニ容易ナラザルナリ況ンヤ從來貴國ノ  
我ヲ愛スルノ形状ヲ以テスレハ今般モ尋常  
ノ談判ニ至リ難キヲ慮リ馬關長崎等ノ地ニ  
ハ數多ノ軍艦及兵隊ヲ繰リ出シ置キタリ  
此等モ是レ皆兩國ノ舊好ヲ重シスルノ主意

ヨリ出タル事ナリ此邊ヲ考ヘラレテモ貴國  
ニ於テ和好ノ本意ヲ表シ速ニ使節ヲ答派セ  
ラルベキハ當然ノ様ニ被存候然ルニ我カ旧  
幕府ノ時ニ貴國ヨリ使節ヲ我國ニ差立ラル  
ハ容易ナラス出費モ多キ由兼タリ右等ハ  
今日ニナリテハ實ニ無用ノ事ニテ各國トモ  
使節ヲ派出スルニハ書記官トモ僅カ五六名  
位ニ過スシテ簡便ヲ貴ニ繁擾ヲ省キ惟情意  
ノ相通スルヲ主トス故ニ自然貴國ヨリ使節  
ヲ發スルナリ至ラハ釜山マテ出向キニサヘ  
ナレハ時々我國ヨリ往復ノ便アル汽船ニ乘  
込マルレハ事誠ニ容易ナリ吳々モ此事アリ  
タシ



申

縷々ノ貴諭事理自カラ當ニ然ルニ遠ニ  
我朝廷、具申スヘシ

宮

唯今野村ヨリ申上ケシ如ク貴國ニテ愈使節  
派遣ノ順序ニ相運ヘハ誠ニ大慶ノ事ナリ釜  
山ヨリ我國ノ蒸気船ニ乘込マレ下ノ関ニ至  
リ郵便船ニ乗り替ヘ東京ニ至レハ實ニ簡便  
ニテ成ルタケ出費ニモナラス様ニ周旋致ス  
ヘシ且ツ政府ヘノ進贈物等ハ一切之レナク  
シテ可ナリ昔日ハ贈答ヲ厚スルヲ以テ禮ト  
セシカトモ方今ハ何レノ國ニテモ贈品ヲ齎  
ス等ノ事ハ更ニ之レ無シ此度兩大臣ヨリ諸

品ヲ呈シタレトモ是ハ全ク條約順成ヲ喜フ  
ノ心ノ溢ル、ヨリ出タルモノニテ決シテ平  
常使節往復ノ例ニアラス  
貴使差遣ノ事ハ我ヨリ期限ヲ刻スル譯ニハ  
之レナシト雖成ルヘクハ六ヶ月後通商章  
程取調ニナル以前ニ在レハ我國ノ事情モ具  
サニ分リ我政府ノ誠意ヲモ了解セラレベシ  
乍去六ヶ月内ト申シテハ貴國ニテ猶其都合  
ニ運ヒ難キ丁ナラハ先ツ本使節ニアラス凡  
理事官カ又ハ遊覽書生ニテモ我國ノ形勢ヲ  
視察スルニ足ルヘキ人物ヲ差立ラルニ様ニ  
相成ル時ハ猶更手輕ニテ能ク相分ルヘシ一  
休貴國ニテハ我國人ノ洋服ヲ着タルヲ見テ



日本人ハ残ラス夷狄ニ變シタリナト云フ人多クアリ又其外ニモ種々六ヶシキ議論ナトスル人モ有ルヨシ可成ハ斯ル人達ヲ出サレ我國ノ實況ヲ目撃シテ會心スル所アラシメハ殊ニ貴國ノ都合ニモ宜カルヘシト思ハル申

成程左様ノ者ヲ遣ス方至極宜シカラシテ何レモ朝廷へ申立必ラス右ノ運ヒニ立至ル様ニ周旋スヘシ若シ其場合ニ至ラハ殊ニ兩君ノ意ヲ煩スヲ請フ

野官

領兼何様ニモ周旋スヘシ

野

釜山浦ノ義ハ從來ノ交易場ナシ且六ヶ月後通商章程取極メマテハ先ツ諸事旧慣ニ仍ラサルヲ得サルヘシ不去貴國ニテモ此マテノ通り過嚴ニ察分アラレテハ自然紛糾ヲ醸シ今般條約ノ主意ニ悖ルノ境ニ至ルナキヲ必トス可カラス故ニ成ルタケ寛裕ニセラレタシ此例ハ總ニ石垣ヲ起ヘ出レハ輒ケ之ヲ嚴禁シ又ハ門前ニ至レハ忽チ扉ヲ閉ツル杯ノ事ハナキ様ニナサレタシ尤モ此方ニ於テモ精々注意シ強壓ラシキ様ナルナハ成サセマシ

申

是モ亦領兼ニ速ニ之ヲ東萊府使ニ通達ス



トシ後レ貴方ニ於テモ成ルルヲケ注意セラ  
レシム

野

本日條約調印濟ノ上ハ獨リ東萊府へ達スル  
ノミナラス彼ノ御批ノ意ニ準シ速ニ全國ニ  
布令セララルヘシ我國ニテハ速ニ條約文ヲ刊  
刻シテ全國ニ布クヲ例トス

申

勿論全國へ布告ナスヘシ

野

前日照會セシ貴國々旗ノ義ハ速ニ造製シテ  
一本ヲ送遞セラレタシ右ハ同盟國互ニ慶吊  
ノ事ナル時ニ必要ノ具ナレハ送遞ノ速ナル

ヲ期ス

申

領義ス是亦朝廷へ具陳シ我使節差遣ノ事  
アル時ニ携帶セシムヘシ  
其他各國ノ形勢及ヒ富強ノ基本等ノ雜話  
有リ今之ヲ略ス



臣清隆臣馨無似ヲ以テ叨リニ重任ヲ忝フニ朝  
鮮國ニ奉使シ彼國接待ノ大臣ト會商シ奉使  
命ヲ達スルヲ得タリ因テ其始末ヲ左ニ上陳ス  
臣等一月六日闕下ヲ辭シ對州竹敷港ニ抵リ外  
務少丞廣津私信ノ釜山ヨリ歸ルニ會シ其先報  
口陳書ヲ彼官貢ニ面交シ既ニ京城ニ轉報シタ  
ル旨ヲ聞知ス然レ彼猶其事ノ實ヲラサルヲ疑  
フノ意アルヲ察シ使船果シテ江華ニ前往スル  
ノ實況ヲ示サンカ為メ護衛艦ノ一部ト稱シ釜  
山ニ回航シ同地在留ノ官貢ニ命シ其趣ヲ彼ニ  
通知セシメ夫ヨリ江華ニ向テ進往シ護衛艦一  
同南陽府下沿岸ニ碇泊シ先ツ益春矯龍ニ艦ヲ  
分遣シテ江華江ヲ溯リ江華府ニ至ル南北ニ口

Blank page with faint vertical lines and ghosting of text from the reverse side.



又測量セシメ始テ南口ノ進行ニ便ナルヲ知リ  
二月四日南口ヨリ進ニ草芝鎮前ニ停泊同十日  
江華府ニ入り彼國接見大官判中樞府事申憲副  
官都摠府副摠管尹滋養ニ面會シ翌十一日訓條  
ノ旨趣ニ原キ江華砲擊ノ事及彼ノ從前我使書  
ヲ接受セサルノ件ヲ談判ニ及ヒシニ彼云フ雲  
揚艦ヲ砲擊セシハ其日本艦タルヲ認メサルニ  
由ル今己ニ日本艦タルヲ知ル豈驚歎セサラン  
ヤ而シテ使書ヲ接受セサルハ全ク當時ノ疑惑  
ニ由テ今日ニ在テハ既ニ盡ク氷解セリト糊塗  
摸稜未タ其要領ヲ獲サルニ由リ續テ翌十二日  
戊辰以來無禮ヲ我ニ加ヘタル事實英ニ畏キニ  
我艦船ノ旗號ヲ送付シタル件ヲ歴叙シ文憑ヲ

取り問詰セシニ彼初テ此事必ス朝廷ヨリ相當  
ノ謝辭アルヘシト朋言セリ是ニ於テ兩國相交  
ル必ス條約アリテ以テ其信ヲ固フセサル可ラ  
サルノ意ヲ陳シ條約案ヲ出シ高議ニ及ヒシニ  
彼レ京師ニ稟報シ其要分ヲ待ツヲ求メ十日ノ  
期ヲ勉シ決答スヘキヲ約ス乃チ府ニ留リ報ヲ  
待ツ然ルニ彼其屬官ヲシテ意ヲ通セシメ條約  
中異議アルノ件ヲ刑改センヲ乞フ臣等以為ク  
和好ノ大局ヲ全フセンニハ亦少シク寬恕スル  
所アルヘシト因テ彼ノ欲スル所ニ從ヒ其緊要  
ナラサル條件一二ヲ刑改ス但批准ノ一節ニ至  
テ彼己ニ國王ノ名ヲ署スルヲ欲セス僅ニ其御  
寶ヲ鈐スルヲ肯ニスルノミ蓋シ彼陽ニ和好ヲ



主トスト雖在內猶猶嫌ヲ懷キ苟且苟ヲ了セシ  
ト欲スルノ意アルヲ揣リ二十日ニ至リ遽ニ面  
接ヲ乞ヒ批准ノ事ヲ議シ反覆辨論スレバ彼禮  
典ヲ以テ口ニ藉キ多方飾辭我ノ言フ所ニ服セ  
ス適ニ京師回報アルニ會ス彼又議政府照會ス  
ル所ノ謝辭文案ヲ出示ス之ヲ見ルニ言頗ル辨  
解ニ涉リ中謝ノ實ヲ是ニ於テ使事協ハサル  
ヲ知リ己ムヲ得ス歸國スヘキヲ發言シ漸然決  
去ノ意ヲ示セリ二十二日帰装ヲ理メ將ニ去ラ  
ントスルノ際申尹二人旅館ニ來リ為ニ行期ヲ  
緩フスルヲ請ヒシカトモ聽カス彼レ又云フ明  
日ヨリ五日ヲ限リ事順成ニ至ルヲ期スヘシト  
乃チ答フルニ明日ヨリ四日間船ヲ留メ報ヲ待

ツヘキヲ以テレ府ヲ發シ船ニ回ル二十五日ニ  
至リ彼一切我ノ求ムル所ニ應シ條約ヲ互換ス  
ヘキヲ決答セシニヨリ二十六日再々江華府ニ  
入り二十七日申尹ト會同シ條約互換ノ事全ク  
畢リ即日府ヲ發シ二十八日護衛艦一同解纜歸  
朝セリ謹テ事狀ヲ具シ候テ修好條規及ヒ批准  
謝辭ヲ呈シ以聞ス頓首再拜

明治九年三月

特命全權辦理大臣黒田清隆  
特命副全權辦理大臣井上馨



附録  
 其書...  
 大臣ノ議事諧ハサルヲ以テ當ニ歸國スヘ  
 キヲ發言スルニ方テヤ將サニ送ルニ決絶  
 書ヲ以テセントス其草案既ニ成ル但末々  
 潤色ヲ經ス事順成ニ歸スルニ會シ此稿終  
 ニ廢紙ニ屬ス然レ其畧亦後前兩國交渉ノ  
 始末ヲ觀ルニ足ルヲ以テ此ニ附存ス

附録

大日本國 特命全權辨理大臣 某 致書 朝鮮國 判中樞府 副總管 尹閣下 本大臣等奉命派  
 貴國以來屢次與貴大臣接晤詢商以善都修好  
 之義剖陳詳晰不遺底蘊莫非為兩國蒼生計又  
 經將新立和約之案遞付呈覽貴大臣不我遐棄



見示以一々稟報京師之意本大臣等剋期俟報  
詎料頃義回教所議各節均不見聽細不獨於從  
前交誼睽隔之故無一息悔悟之意巧辭飾過佞  
辨禦人本大臣等自知使事不成矣今將束裝上  
途唯恐我國惓惓於隣誼之誠未蒙明悉而徒以  
為囂々相擾故不憚煩瀆庶致其搜聚以願貴大  
臣自反省焉抑我朝中葉以降政權歸武門之手  
迨德川家康開幕府于江戶始與貴國訂鄰交令  
對馬守宗氏掌聘使通商之事爾來三百年矣我  
明治一年戊辰王室中興收德川氏政權一掃天  
子親裁乃命對馬守宗義達依禮修書差其臣樋  
口棊于貴國告我朝革新狀由美商尋交事宜  
如其書契体裁皆依當時新制即其用皇室奉勅

等字樣是人臣相交各尊其君主以表友邦親睦  
之義者亦情理之當然也何曾有一失禮之語而  
貴國訓導安俊卿以其違旧規作而不受使臣辨  
論不已安俊卿遂至日苟其一言違格雖百年相  
持徒傷鄰好而已豈有濟事之期東萊府使鄭顯  
德亦送書拒之意畧與安同樋口留滯五年遂不  
得達其書而歸庚午十月我外務權少丞吉岡私  
殺等齋外務卿澤宜嘉致于貴國禮曹判書之書  
抵于釜山尋宗義達送書于東萊釜山兩使求其  
善待我使臣東萊府使鄭顯德釜山僉使金澈均  
回書以從來無接外務省使負之例拒而不接訓  
導安俊卿別差李山如亦有書云此事一款雖千  
言萬語決無回聽之理於是外務卿書契不得達







來往如舊至甲戌七月東萊府使朴濟寬運遣內  
裨將南孝源晤館長森山茂致尋舊好講新盟之  
意尋按廉帶官太九谷等就館晤森山云多年阻  
隔非出我朝廷之意中間有壅蔽之徒而然也及  
訓導玄昔運別差玄濟舜自京至與森山相接擬  
定三件便法昔運濟舜呈書曰一壬申年書契回  
成不若成則直差回書兩書契交  
換之事一國書如對有難安處以至不捧之境則更  
換日貴國外務卿對于我禮曹判書自外務大丞  
對丁參判一又有新書契別定幹使曹成書契送聘使  
定之事一又期月以四答事在三件事中一事  
于東京預定日期以論滿盡轉達于朝廷之計而  
定之意因今日公論盡轉達于朝廷之計而  
里姓還必不可論而十既而太九谷亦賚左將軍  
餘日矣只冀埃之焉

趙審夏書至致交和之意十月朴濟寬致書於森  
山報所擬三件便法廷議決于第二件且約不出  
五朔內修外務卿丞之書契別定幹使至東萊府

相接森山乃反報我朝廷謂貴國始有所省悟兩  
國之交可自是而成即以森山為理事官廣津和  
信為副官以翌年二月如期發往至則情勢一變  
大異前日訓導玄昔運屢請緩接府使之期及其  
期已迫玄俄留書上京去既而又還至屢論我禮  
服之制與舊時異森山等論辭不已玄遂至有允  
事違例則不可許施之語則其侮慢亦已甚矣要  
之不過藉端設詞以飾失信之過於是乎貴國絕  
我之意決矣森山等空返國時又有江華砲擊之  
事先是以我汽船過貴國沿海者日多恐沿海人  
民或未認我旗章故我官吏在釜山以旗章儀本  
送呈于貴國官負望預布告全國而貴國禁令戒  
飭之不至遂致有是暴舉我朝廷未忍以兩國之



好委之奎泥特派本大臣前來初次與貴大臣接  
晤時貴大臣乃言從來兩國睽隔之故今已渙然  
永釋矣當共圖今後和好之道因思兩國相交苟  
不有條約以相維信盟以相徵則猜嫌疑阻之端  
起矣非永遠相安之道是故首以修好條規為相  
質貴大臣論難各節俱已曲意俯從思以周全和  
好而批准一節貴大臣藉口禮典不肯署御諱然  
則兩國帶礪之盟終成一無證憑之物大與本大  
臣等奉詢之意相反故於日者西晤之時往復辯  
論至再至三貴大臣一意執拗至云無復覈之之  
道是貴大臣口說和好而意實不願諧約也夫自戊  
辰至今八年前後使者並不見接而又砲擊加我  
船艚是何等事件而前者表示議政府照會稿本

於從前使書擯斥之事喋々回護辨說不見悔謝  
之意且無一字及砲擊之舉豈不辱我國之甚乎  
哉此事已非筆舌之所能爭也本大臣等不復能  
曠日延滯惟有據實復命而已我朝廷必應另有  
處分矣貴大臣其勿悔之











